



表紙 スズキリュウ様

工藤 圭



ZEROの法則とは、ようするに失恋パターン集ですよ



写真 [村田 幸一郎 \(スタジオ猫屋\)](#)

ZEROの法則 1

忙しい人はずっと忙しい

シチュエーション

会社の同僚で社内ではそれなりに会話するものの、二人きりで出掛けたことはない。男は現在の煮え切らない関係に終止符を打つために、東京ウォーカー片手に彼女の家に電話をかけた……。

男

「あ、もしもし高橋ですけど」

女

「え、高橋さんですか？ どうしたの？」

男

「うん、今、平気？」

女

「大丈夫だけど、どうしたの？」

男

「えーとさ、この間、新宿ジョイポリスのチケット、友達からもらってさ」←本当は自分で購入

女

「へえ……」

男

「あの、一緒にどうかなあとって……」

女

「……え、あたしが高橋さんと一緒になってこと？」

男

「うん」

女

「……」

男

「……」

女

「……」

男

「……」

女

「……いつ？」

男

「えっと、来週の日曜日とか」

女

「ああごめん、来週の日曜はちょっと忙しいから……」

男

「え、じゃあ、再来週の土曜日は？」

女

「うーん、ちょっと無理かもしれない……」

男

「日曜日は……？」

女

「……日曜……日もちょっと忙しいから……」

男

「来月とかは？」

女

「来月もなんかいろいろ予定入っちゃって忙しいと思う……」

男

「じゃあ、再来月は？」

女

「再来月は試験とかあるし、なんかいろいろ用事が入るかもしれないし、忙しくなりそうだから……」

男

「……冬休みは？」

女

「多分、スキーに行くと思うから……忙しいかも……」

男

「来年は……？」

女

「資格試験があるから、やっぱり忙しいと思う……」

男

「じゃ……明日、ファミレスで飯でも食わない？」

女

「明日も忙しくて……」

男

「……」

女

「……」

男

「……」

女

「っていうか、**今もちょっと忙しいから……**」

男

「……ああ」←撃沈

女

「じゃあ」

このパターンは男性の方ならよく経験のあるパターンだろう。多分この調子で行くと、**死ぬまで**忙しいと言われると思われる。

これは単純に言うに「行きたくない」わけなのだが、誘っている方はそうは思いたくなくて、本当に忙しいんだと思い込み、かえって墓穴を掘ることとはよくあることだ。

客観的に見れば断り文句だとすぐわかって、当事者になるとどうしてもそれがわからなくなる。男性は「なんでそんなに忙しいんだ、飯を一緒に食べる時間ぐらい、その気になれば作れるだろ！！」と逆上するわけであるが、**その気になれないから作らない**という大事なことを忘れがちだ。

似たようなパターンで「お金がないから」というのが挙げられるが、この場合も大抵の場合、断り文句だと思っていいだろう。お金があろうがなからうが、会いたい人に誘われればなんとか都合つけてくるものだからだ。

ZEROの法則 2

以前は親しかった女の子なのに、久しぶりに電話すると話し方が敬語になっている

シチュエーション

某ハンバーガーショップに勤めている男(21歳・大学生)と女(19歳・短大生)。二人はバイト先で知り合って4カ月。男はそれとなく、プレゼントをあげたりして女に好意を見せている。何度かガストなどで食事をしたことはあるが、遠出をしたことはない。

男はここで一步前進しようと、「ゆっくり遊べる遊園地ガイド」を片手に女の家

に電話をかけた……。

男

「ねえ、美紀ちゃん(←ちゃん付けて呼べるようになったのは1カ月前)、今度、**横浜ドリームランド**に行かない？ 友達からただ券もらったんだ」

女

「え、行きた〜い、ねえ、ただ券ってパスポート？」

男

「うん、そうだよ」

女

「行く！ え、いつにしようか？ 私、来週の金曜日空いてるよ」

男

「あ、俺もその日休みだから、その日にしようか」

女

「うん！」

仲のいいバイト友達の図という感じで、いい雰囲気だ。女の子は年下であっても、男にため口をきいており、距離を感じさせない会話をしている。ところが、これが、女の子は就職活動のためバイトをやめ、男も時給のいいバイトに鞍替えした、その2カ月後になると、大抵こうなる。

男

「あ、もしもし終了です！ 久しぶり！」

女

「あ……こんにちは」←いきなり他人行儀

男

「あ、あの、元気？」←面食らう

女

「あ、はい。……元気です」

男

「あ、あのさあ、今度、ディズニーランドに行かないかなあと思って。い、いや、ほら、前に美紀ちゃん、行きたいって言ってたから」

女

「すいません、ちょっと就職活動で忙しいので……」

男

「そうかあ……。あ、それだったら就職活動が終わったら行こうよ」

女

「すいません、友達と卒業旅行に行く約束をしているので、空いている日とかわからないし、ちょっと約束するのは無理です……」

男

「(空いている日がわからないのであれば、まず自分と遊びに行く予定を先に入れて、その日と重ならないように卒業旅行に行けばいいのでは……？ と思いつつ)卒業旅行へ行くんだ、いいなあ。俺なんて卒論が書き終わらなくてそんな暇ないよ」

女

「そうなんですか」

男

「うん。今も腰痛くて」

女

「大変ですね」

男

「……」

女

「……」

男

「あ、昨日、踊る大捜査線の映画観たんだ。すげえ面白かった」

女

「へえ」

男

「……」

女

「……」

男

「えっと女の刑事、誰だっけ、あ、そうだ、深津絵里っていいよね」

女

「(鼻からため息)」

男

「……」

女

「……」

男

「あの、なんかごめんね、忙しいときに電話しちゃったみたいだね。
じゃ、ばいばい！」←耐えられなくなった

女

「はい。さようなら」

ツーツーツーツーツー←電話切れた

頷かれる男性の方も多いと思う。見ていて可哀想になってくるほど感情が噛み合わない会話である。最後も、男性は相手に対しても「ばいばい」と言って電話を切ってほしいと思っているのにかかわらず「さようなら」。

いったい、なぜこのようになるのであろうか。

敬語というのは間を置く言葉である。彼女にとって彼は確かに「よいバイト友達」であったが、共有する場が一つもなくなり、時間の経過とともに結びつきが薄れ、結果として知人になってしまったのだ。**ただの知人**に強い結びつきを求められたら敬語で突き放すというのが女性の自衛策なのであろう。

まあ、彼もバイト在籍中に強く押していたら展開は変わった可能性も

あつただろうが、一旦、こういう状況になるとまた親しくなるのはほとんど不可能だと思われる。

ZEROの法則 3

初デートの別れ際、相手の女が突如敬語で喋りだしたら、脈なし

シチュエーション

インターネット上の「彼女募集」サイトで彼女(23歳・0L)と知り合った男(29歳・会社員)。二人は幾度かのメール交換と電話を踏まえ、会う約束を果たす。そして初デート、二人は東京ディズニーランドへ行き、帰りの電車の中、いい雰囲気では別れ際を迎えるが……。

男

「いやー、スペースマウンテン面白かったよねー」

女

「うん、あとシンデレラ城とか、よかったよね」

男

「俺、ディズニーランド初めてだったからさー」

女

「へー、そうなんだあ。あたしはもう……10回近く来てるかなあ」

—ここでしばし沈黙—

男

「……鈴木さん(相手の子の名前)って、結構元気な感じの子だよな」

女

「え……そうかなあ？ ……あたし結構暗いよ」

男

「いや、そんなことないって。なんかすごいはいでたし」

女

「ははは、あたし、ディズニーランド好きだから」

男

「そっかあ……ふーん」

—またまた沈黙—

男

「……あ、鈴木さん、次の駅で降りるんだよね？」

女

「うん、そうだよ」

—電車が鈴木さんが降りる駅に到着—

男

「それじゃ」

女

「……はい、今日は付き合ってもらって**どうもありがとうございます**」←突如敬語

男

「あ……いや、こっちこそ、ありがとうございました」←つられて敬語になる

女

「明日仕事なんですよ？ 頑張ってください」

男

「あ、うん」

女

「今日はどうもでした。それじゃ、さようなら」←またね、というような言葉はない

男

「あ、じゃあまた連絡する！」←手を振るが

女

「……」←女は無言で頭を下げた

そして電車は駅を離れていった……

前回に続いて敬語ネタなのであるが、やはり人と人との精神的な距離を測るのに言葉というのは重要だ。女友達への久しぶりの電話も、「あれ一、どうしたの一？」なんて言われているうちはまだいいが、「**なんですか？**」と言われ始めたら、もうおしまいだ。

今回の例のパターンで行くと、彼がこの後、電話で「あの一、次いつ会

えるかなあ？」などと電話しても、ZEROの法則第一回目パターンのように、「ちょっと忙しいんですけど」とかわされ続けるだろう。

こういう場合は、しつこく会う約束を取り付けようとしなくて、しばらくはメール交換を続けるのがいいと思われる(勿論、相手が返事を返してくれれば、であるが)。

ZEROの法則 4

アプローチしている女に、「前の彼氏のことを忘れられない」と言われたら、まず駄目

シチュエーション

とある社会人テニスサークルで知り合った男(23歳)と女(23歳)。二人は、周りが「あの二人できてんじゃないの?」と噂するほどの仲の良さ。最初は、なんの気持ちもなかった男も、段々とその気になりついに彼女に恋心を抱く。そして、初めて二人きりでデートに誘い、鎌倉へドライブに出掛けた。

男

「海、綺麗だね」

女

「うん、わたし海へ来るの久しぶり」

男

「この辺、よくテレビとかに出てくるよね。七里ヶ浜っていうんだっけ?」←デートマップで調べた

女

「へえ、そうなんだあ」

男

「ちょっと、その辺に車停めて、海岸に降りようか」

女

「うん、そうだね!」

二人、車を停めて海岸に降りる。実際こんなことすると大渋滞を起こすので気をつけましょう

波の音がする。晩秋の海で、人はほとんどいない

男

「ねえ、沢井さん」

女

「ん?」←波と戯れていた

男

「あのさ……」

女

「どうしたの？」←足を止めて、男の目を見ながら

男

「え、うん……」

女

「なんか、変だよ、緑山君」

男

「え、変じゃないよ」

女

「なんか、相談？ 聞いてあげるから言ってみなよ。……あ、もしかして好きな人のこと？」

男

「え、そんなんじゃないよ」←ひきつった笑みを浮かべながら

女

「じゃあなに？」

男

「え、うん……あの、あのね」

女

「あのねのね？」

男

「いや、違うよ(笑)。……あのさ、俺」

女

「……」←やばい雰囲気を感じてきた

男

「俺、沢井さんのこと好きなんだ！」

女

「……」←「え？」というような顔をしながら止まる

男

「付き合ってほしいんだ」

女

「……本気で言ってるの？」

男

「うん」

女

「……」←俯いて考え込む

男

「……」←心臓ぼくぼく状態

女

「……わたしも緑山君のこと好きだよ」

男

「え」←心の中でガッツポーズ

女

「……だけど、なんていうんだろう、付き合うとか付き合わないとか、そういうことを考えたことはないんだ」

男

「……付き合う対象として見れないってこと？」

女

「……っていうか……。うん……。わたしね、前に付き合っていた人がいて……。もう別れちゃったんだけどね。だけど、その人とは5年も続いて、なんていうか、今でも彼のこと考えちゃったりしてるんだ。彼のこと、まだ好きだし、やっぱり忘れられない。……。もう忘れなきゃって思ってるんだけどね(笑顔で)」

男

「……俺と付き合えば忘れられるかもしれないじゃないか」

女

「ありがと。……。わたし、冗談抜きで緑山君の気持ち嬉しいよ。だけど、今はその気持ち受け止められない。……。あ、見て見て、ほら、**ジェットスキー**」

今回の法則。前の恋人を忘れられない。恋愛において、未練がましいのは圧倒的に男の方が、どういうわけか、異性にアプローチされてこの言葉を言うのは圧倒的に女の方が多いような気がする。私は、未だかつて私の友人が「前の彼女が忘れられないと言って、女を振った」というような話を聞いたことがない。これはどういうことなのだろうか。

簡単に言うと、「あんたは前の彼氏よりも下だよ」というようなことだと思われる。

以前、こんな話を聞いたことがある。「カッコいい男から『電車の中でいつもあなたを見ていました。僕と付き合ってください』と言われれば、女はそれを運命の出会いだと思う。だが、不細工な男から同じことを言われたら、女は彼を**ストーカーだと思**う」と。まさに言い得て妙だろう。人(女性)の気持ちは常に一定というわけではなく、相手が違えば変わるものなのだ。

今回のケースの場合、男性が「明らかに」前の彼氏を上回っていれば、その時点で女性は**前の彼氏を忘れてくれる**と思われる。残酷なようだが、これが現実だ。

しかし、前の彼氏を忘れられない、と言われても落胆することはない。付かず離れず、彼女の心の中に自分を置くことが出来れば、彼女はいつか振り向いてくれるだろう。まあ、それが何年先のことはわからないし、途中で彼を忘れさせてくれる男性が出現する可能性もあるが……。

ZEROの法則 5

ある程度仲良くなった後、2回連続でデートがうまくいき、3回目を電話で誘ったとき、急に話し方が冷たくなる女には間違いなく男がいる

シチュエーション

25歳会社員の男と同年の女(OL)。二人は同じ会社に勤めている。

会社の飲み会で隣同士になってから男は女に好意を持つようになり、順調に友達関係を築く。勿論、男としては女を「彼女」にしたいわけだが、意識してしまって「彼氏いるの?」とはなかなか聞けずにいる。しかし、ここ最近、ディズニーランド、シーパラダイスと遠出デートに連続成功し、男は「次で決めるかあ?」との気合いを持って、彼女をナンジャタウンに誘うことにした……。

男

「あ、もしもし、長崎さん? 高橋です」←彼女のPHSに電話をした

女

「あ……はい」←どうもテンションが低い

男

「なにしてたの?」

女

「んー? 寝てた」

男

「そっか……」

女

「……」

男

「……」

女

「なんか用事?」

男

「いや、えーと、この間、シーパラ楽しかったよね。……また行きたいね」

女

「……ん、そうだね……だけど、これからちょっと忙しくなるからなあ」←かつたるそう

男

「え、あ、そうなんだ」←男、困惑を隠せない。前回デートの別れ際、「また行きたいね!」と彼女は楽しげに言っていたはずなのに……

女

「うん、友達といろいろ約束してるんだ」

男

「そっかあ。……あのさあ、今度ナンジャタウンに行こうかな、と思って」

女

「へー、いいじゃん、**行ってきなよ**」←すっかり他人事(ここはポイントである)

男

「いや、長崎さんと行きたいと思ってんだけど……」

女

「え、あたし? 彼女でも連れて行ってきなよ」←急に「彼女」なる存在を出す

男

「いや、俺、彼女いないからさ」

女

「へー、そうなんだあ。早くいい子見つけないとね」←あくまでも突き放す

男

「……あの」←男、完全に焦り熱くなってくる

女

「ん?」

男

「俺さ、あの、長崎さんのこと……」←ついに告白

女

「あ、ごめん**キャッチ入っちゃった**。切るね。ばいばい」←面倒なので告白させない

ツーツーツー…… ←電話切られた

領かれる方も多いパターンだと思われる。よく恋愛相談で、「好きだったら**するはずなのに……」というのがあるが、こういう意識に縛られてもうまくいかないものである。が、あまりに寛容すぎても駄目である。例えば今回のケースの場合、「本当に忙しい」「キャッチが入って切られるのは仕方がない」などと寛容な姿勢で臨みたくなるが、忙しいはもろに「ZEROの法則」にはまっているし、キャッチだったら、女の子が彼のことを気に入ってるならば、無視するか、「ちょっと待っててね」ということで、そのまま切らずにいる場合が多い。が、今回は切られている。これを楽観視してはいけない。今回の例の場合は、ずばり女に彼氏がいると思っただけで間違いはないだろう。嫌いだから邪険な態度をとっているのではなく、迷惑だから邪険な態度を取っているわけである(似ているが、ちと違う)。

彼氏のいる社交家な女性というのは、彼氏以外の男性とも頻繁に遊ぶ。が、彼女の中で「これ以上、近寄ってくるなよ」という壁があり、その壁に触れた瞬間、今回の例のように跳ね返されるわけである。

ZEROの法則 6

とてもフレンドリーな女に限って、男が告白しようとする直前、「あたし、あなたの前だといろいろ話せるんだけど好きな人の前では全然話せなくなるの」などと言い始める

シチュエーション

19歳の大学生と19歳の女子大生。二人は高校の同窓会で1年振りに再会し、彼女の方から積極的に友達になってきた。二人でしょっちゅう遊びに出掛け、男としては「これは気があるのか？」と思い、告白を考える。そして彼女の誕生日、男は食事に誘い、そこで告白することに決めた……。

男

「中谷と俺って、なんか気が合うよね」

女

「うん、同窓会の時も、どうして高校の時、こんな楽しいやつをほっといたんだろう？ とか思っちゃったもん(笑)」

男

「うん、俺もそう思った(笑)」

女

「……でもさあ、こんなんでもほんとは気弱なやつなんだよ、あたし」
←急にしおらしく

男

「はは、よく言うよ、どこが？」

女

「ん？ いろいろ、あるの」←訳あり的な笑いをする

男

「え、いろいろって？」←男、女の態度が気になってくる

女

「なんか言いたいことも言えないっていうかさ……」←男の目を見て悪戯っぽく笑う

男

「え、言いたいことってどんなこと？」←俺に告白か？ 脈拍数一気にアップ

女

「ねー、三田君から見ると、あたしってどう見える？」←両手に顎を乗せて言う

男

「え、どうって、……んー、楽しい奴。一緒にいてなごむ」

女

「えー、あたしといて心がなごむー？(笑)」

男

「うん、なんか安心するよ」←口説きに入ってきた

女

「……ありがと」←まず口元だけで笑い、そのあとにちょっとだけ前歯を見せて笑う

そして、ちょっと間が出来て、男が思いきって告白しようと口を開いた瞬間……

女

「なんか、三田君の前だと素直にいろいろ言えるけど、**好きな人の前だと言えなくなるんだよなあ**」

男(心の中で) **え？**

この後の展開をあえて書くなら、男性が玉砕覚悟で女性に告白した場合、

「わたし、三田君のことはいい人だと思うし、好きだよ」

↓

「でも、恋愛対象として見たことはないんだ」

↓

「三田君の気持ちに答えられなくて本当にごめんね」

という、黄金のパターンへと流れ込む。

好きな人の前では素直になれない、あなたの前だとなんでも言えるというのは、よく取れば「信頼」を表しているのだが、悪い(だけど正当な)解釈をすると、「**あなたを異性としては見ていない**」ということになる。

男性からすると、フレンドリーでさっぱりとした気質の女の子というのは、すぐに彼女に出来そうな、あるいは向こうから勝手に彼女になってくるような錯覚を覚えるものであるが、得てして彼女たちの恋愛観は古風であり、好きな人以外に振り向くことはないというのが特徴だ。

そして、基本的に性格がいい子が多いので、片思いの男ともうまくいくことが多い。この手の女性を好きになると大概つらい思いをするので個人的にはやめておいた方がいいように思う。

ZEROの法則 7

いつもは絶対誘いに乗ってこない女をデートに誘って見事に成功したとき、前日に確認の電話を入れると、「やっぱり用事が入っちゃって……」と断られる。

シチュエーション

28歳の男(会社員)と同じ会社のOL(23歳)。男は、女を3カ月ぐらい前から好意を寄せていて、何度かデートに誘ったものの、芳しい返事はなかった。断られる理由は大抵の場合、「忙しい」である。だが、ある日、昼休みになんとなしに「今度海の方へドライブ行ってみないか？」と誘ったら、2分間ほどいろいろ言われた挙げ句「いいですよ」という返事。

そしてドライブの前日、男は時間の確認のために嬉々として電話をかけた……。

男

「あ、もしもし、斉藤ですけど、美奈さんいらっしゃいますか？」

女

「あ、はい、わたしです」←なんとなしに、声が暗い

男

「あ、加藤さん？ 斉藤です」←対照的に明るい

女

「はい」

男

「あのね、明日のことなんだけど」

女

「……あの一」

男

「え？」

女

「明日って、確かドライブに行く日でしたよね？」

男

「うん、そうだけど……」

女

「あの一、大変申し訳ないんですけど、急に用事が入っちゃって」

男

「え、用事？」

女

「母が身体を悪くして、私が病院に連れて行かないといけないんです」

←大抵、理由は深刻

男

「ああ……それじゃあ無理だね……」

女

「せっかく誘っていただいたのに、ごめんなさい」

男

「いや、しょうがないよ。それじゃまた、会社で」

女

「はい、本当にすみません。それじゃ……」

男

「はい、さようなら」

よくある例だ。女の子は、特に思い入れのない相手との約束は、かなりドタキャン率が高い。

特に迷っている場合、男が上の例のように電話なんかしちゃった日には、必ず、「やっぱ行かない」という方向で話を進めていく。

とは言え、上の例はまだいいのだ。ちゃんと相手に断りを入れる形になっている。問題は下に書いたパターンである。とりあえず読んでいただきたい。

男

「あ、もしもし、斉藤ですけど、美奈さんいらっしゃいますか？」

女

「あ、はい、わたしです」

男

「あ、加藤さん？ 斉藤です」

女

「はい」

男

「なにやってたの？」←本題に入る前に軽く

女

「いやあ、新しいプロジェクトの準備を家でやりました」

男

「え、加藤さんの担当の仕事って、そんなに大変だったの？」

女

「もう資料整理をここでやっておかないと、残業の連続になっちゃうので家でしないと」

男

「随分、忙しいんだねー」←なんとなく明日のことを言いづらくなる(畏にはまっている)

女

「もう、めちゃくちゃ忙しいですよ。**明日も大変だー**」←とうとう、ここで突き放す

男

「あ……そうだね……」←(あれ？ ドライブは?)と思うが、言い出せない状態

女

「明日は、まず図書館行って、帰ってからワープロ打って……」←畳み込む

男

「それじゃあ、ドライブなんて行けない……よね?……」←かるーく口に出してみる

女

「え、斉藤さん、ドライブ行くんですか？ 余裕ですね」←約束なんてなかったことになっている

男

「いや、そんな余裕じゃないよ」

女

「……あ、ちょっと親が呼んでいるんで、すみませんけど……」

男

「あ、はいはい、それじゃまた」

女

「はい、会社で」←もう自宅に電話すんなよ、と遠回しに

このパターンは本当に最悪だ。あえて忘れているふりをして忙しいを連発しながら、約束自体をなかったことにするという方法である。

女性からすると、結構迷って約束を受けてしまったわけであるが、なにかのきっかけ、たとえば友達から「え、あいつ？ あいつはやめといた方がいいよー」と言われたという場合、友達の名前は当然出せないし、うまいドタキャン文句も思いつかない(ドタキャンしても一度話を受けている以上、再び誘われる可能性が高い。これではドタキャンしても意味がない)ので、このような方法を取る可能性がある。

女性というのは、同性の友達に「あの男は嫌な奴だ」と吹き込まれると、特に嫌な目にあっていなくても「嫌な奴だ」と見てしまうことが多い。そうして、今回のように完全にシャットアウトしてしまうわけである。

ZEROの法則 8

■ 女が男を振った後に言う好意的な言葉は信用出来ない

シチュエーション

19歳の学生(女)と21歳の学生(男)。二人はサークルが一緒に、たまに飲みに行ったりすることもある。男は以前から女に対して好意のあるところを匂わせているが、女の方はのらりくらりとかわすばかりで明確な回答が得られない。それにじれて、男は「俺はおまえのなんなんだ！」と言ってはいけないことを言ってしまう、二人の仲は急速に離れていく。しかし、これではいけないと思った男が謝りの電話をかけた……。

男

「あ、もしもし、俺だけど……」

女

「え？ 加藤さん？」

男

「うん」

女

「どうしたんですか？」

男

「この間は、あんなこと言っちゃってごめん」

—10秒ほど沈黙—

女

「もう忘れて下さい。私も忘れますから」

男

「……あのさ」

女

「はい？」

男

「俺、洋子ちゃんのこと好きだよ」

女

「……」

男

「だから、この間もあんなこと言っちゃったんだ」

女

「……わたし」

男

「ん？」

女

「付き合ってる人がいるんです」

男

「……」

女

「……」

男

「……そう……なんだ」

女

「加藤さんのことは好きだし、一緒にいて楽しいけど……」

男

「うん」

女

「彼のこと裏切れないし……加藤さんの気持ちはほんとに嬉しいんだけど、付き合うっていうのはやっぱり無理です……ごめんなさい」

男

「……そっか」

女

「……でも」

男

「……ん？」

女

「これからも、友達っていう感じだったら、遊びに行ったり出来ると思います」

男

「……二人で？」

女

「……んー……はい」

男

「うん……じゃあまた飲みに行こうよ」

女

「はい。また誘って下さい」

男

「うん……それじゃ、また」

女

「はい。お休みなさい」

男

「……おやすみ、じゃあ」

ありがちである。これは私の体験からなのだが、女の子と知り合って仲良くなって、二人でちょくちょく遊びに行くようになった時、「わたし、今彼氏いなくてフリーだから」というようなことを自分から言い出さない女の子には彼氏がいる確率が非常に高い。

まあ、それはいいとして、「友達だったら……」という言葉。手持ちの辞書を引くと、友達というのは困った時に助けてくれる存在である。確かに困った時になんの手も差し伸べてこない人間っていうのは友達とは言えないだろう。しかし、女性は男性を振るときに簡単にこの言葉を使う。男性はその言葉に期待し、結果、下のような悲劇が起きる。

男

「あ、もしもし加藤ですけど」←彼女のPHSがずっと留守電で、やっとかかった。ちょっと怒ってる

女

「……あ、こんにちは」

男

「ずっと留守電だったね」

女

「あ、寝てたんで」←あっさりと

男

「そっか……」←ちなみに彼のPHSは、自分の番号表示モードONである。

女

「なんですか？」

男

「ん……、なんか今日、嫌なことがあってさあ」

女

「……どんなことですか？」

男

「いや、香川のやつが、俺のやることに文句つけてさ、参ったよ」

女

「香川さんって、加藤さんの友達の？」

男

「そうそう」

女

「……」

男

「ほんと、あいつむかつくよ」

女

「……それをあたしに言って、**どうするんですか？**」

男

「え、いや、愚痴を聞いてもらおうと思って……」

女

「あたし、香川さんのことよく知らないし、そんなことあたしに言ってもしょうがないんじゃない？」

男

「……え、まあ、そうだけど」

女

「言いたいことは本人に言った方がいいですよ。あたしなんか電話してこないで」

男

「……」

女

「愚痴りたいなら、友達にでもすればいいんじゃないですか？」

男

「え、だって、洋子ちゃん、友達……」

女

「え？ **聞こえない**」

男

「いや、洋子ちゃん、あの、友達」

女

「あ、すみません、誰か来たみたいなので、電話切ります。さようなら」

ツーツーツー……←電話切れた

女性が発する「友達」という言葉。時に残酷である。ここまでされるなら、「もう会えないけど、今まで楽しかった」と言ってもらって振られた方が何倍もいい。

女性が男性を振る言葉はたくさんあるが、「あたしなんかより、もっといい人がいる」と、「友達としてだったら、付き合っていけると思う」という言葉はやめた方がいいと思う。本気で友達としての関係を続けていこうというのなら、ある程度時間が経って、振られた側に彼女や好きな人でも出来てからでないと難しいだろう。

男女の関係で、アクションをどちらかが起こした後の「現状維持」と「キープ」ってのは難しいものだ。

ZEROの法則 9

女に告白したとき、「その気持ちはすごい嬉しい。だけど、好きな人に振られたばかりで今は恋愛する気持ちじゃないの」と言われる『今』に、なぜか自分がよくあたる

シチュエーション

18歳の学生(女)と23歳の会社員(男)。二人はバンド「マジカルシャワー」のボーカルとギタリストである。

リーダーでもある男は、「バンド内の恋愛は解散の元凶」と思いつつ彼女への想いを募らせるばかり。秋を迎えて妙に人恋しくなってきた彼は、彼女が欲しいという思いも増幅され、ついに練習後、彼女を呼び出し公園で告白することにした……。

男

「ごめんね、急に呼び出しちゃったりして」

女

「ううん、どうしたの？」

男

「んー……ちょっとその辺座ろうか」

女

「うん」

二人、ベンチに座る。

男

「あの……さあ、えーと……あのね(笑)」

女

「なあに?(笑)」

男

「俺、いつも冗談ばかり言ってるけど、今から言うことはまじだから」

女

「……うん、わかったけど……なんか相談事？」

男

「相談事っていうか……まあ、とりあえず聞いてよ」

女

「うん」

男

「あのね……最近、好きな人が出来ちゃってさ」

女

「へー、鈴木君って彼女いなかったんだ？」

男

「前の飲み会でそう言ったじゃん」

女

「そうだった？(笑) それでそれで？ どんな子なの？」

男

「実は、バンドの人なんだ」←回りくどい

女

「え？ 由美ちゃん？」←由美ちゃんはキーボード担当である

男

「……由美ちゃんじゃないよ」

女

「……」

男

「……」

女

「それって……**どういうこと？**」

男

「**どういうこと**って……だから、美樹ちゃんが好きってこと」

女

「……」←俯いてしまう

男

「……」

女

「……」

男

「……**彼氏**とかいるの？」←俯いた彼女を覗き込みながら

女

「……**そういう人**はいないけど……」

男

「じゃあ好きな人とかは？」

女

「……いないけど……でも」←顔を上げる

男

「でも？」

女

「わたし、鈴木君のこと好きだよ。でも……わたし、この間、好きな人に振られちゃったんだ。その時、結構傷ついて、だから今は恋愛のことは考えられない。もし、鈴木君が**もっと早く言ってくれていればわか**らなかったけど……」

男

「……今は付き合えないってこと？」

女

「うん……ごめんね。今のわたしって**恋愛出来る体質**じゃないから……」

男

「そっか……」

もっとも法則と呼べるものかもしれない。

「今は恋愛する気分になれない」

「今は彼氏と別れたばかりで、人と付き合うなんて考えられない」

「今は彼氏はいない」

言い方はいろいろあるが、共通する言葉は「今」。こういう言い方をされると、じゃあちょっと前だったら付き合ったのか、と突っ込みたくなるが、ちょっと前でもやっぱり「今は……」だろう。ひよっとしたら、一番、男性を傷つけずに振ることが出来る言葉かもしれない。適度に期待を持たせつつ、男性の優しさに頼る。「今は恋愛出来る体質じゃない」などと言われれば、無理矢理「それでも俺と付き合おう」とは言えないだろう。そして、「恋愛対象じゃない」なんていう言葉よりは遥かにダメージが小さいはずだ。

ここで更に押すことで気持ちの強さをアピール出来るとも言えるが、しつこい男とも思われる可能性もある。どっちに転がるかは男性の熱意と女性の恋愛観次第だろう。まあはっきり言って、以前、ZEROの法則で採

り上げた「前の彼氏が忘れられないと言われたら駄目」と同じように、もし、告白された対象が自分の好みと合えば、「今は恋愛する気分になれない」が「**今から恋愛する気分になれる**」に変わるだろう。

まあ、そんなもんだと言われればそんなもんだ。

ZEROの法則 10

「友達から付き合いたい」という女の言葉を過信し過ぎてはならない

シチュエーション

21歳の大学生(男)と20歳の短大生(女)。二人は同じコンビニでバイトしているバイト仲間である。男は、彼女の真面目な働きぶりや客の子供に接する態度の優しさに惹かれ、彼女を好きになり、告白を前提としたデートに誘い、見事にOKをもらう。

そして、デート先である江ノ島水族館で、男はアザラシを見物している彼女に向かって堂々と告白することにした……。

女

「ねーねー、見て、ほら、アザラシが餌もらってるよ。かわいい(*^*)」

男

「ほんとだ」←既に緊張している

女

「アシカもいるよ」

男

「いるねー」←頭の中で告白のシミュレーション中

女

「あたし、水族館に来たの、小学生の時、油壺マリンパークに行った以来だから、今日は凄く楽しいよ」

男

「あ、マリンパーク、俺も行った！ 確か世界最大の淡水魚とかいるところ」

女

「そうそう！！ なんて言ったっけ……ピクルスだっけ？」

男

「それは、マックのハンバーガーに乗ってるきゅうりみたいなやつだよ(笑)」

女

「あはは、そうか(笑)」

男

「魚の交通ショーとかもあったよね」

女

「えー、知らないー、なにそれ？」

男

「小さい魚が、赤の信号だと泳ぐのやめて、青になると泳ぎ出すっていうやつ」

女

「へー、そんなのあったんだあ」

男

「あったんだよー」

女

「そっかあ」

ここで妙な間があく

男

「……あの……さあ」←決心した

女

「ん？ どうしたの？」

男

「浩子ちゃんって、彼氏とかいんの？」

女

「……えー、どうしてそんなこと聞くの？」←やや困った感じで

男

「いや、なんとなく聞きたいなと思ってさ」

女

「……んー、今はいない……かなあ」

男

「前はいたんだ？」

女

「っていうか、あたし、ちょっと前に別れたばかりなんだ。だから今日は気分転換に来たっていう意味合いもあるんだ。だから、中村君に誘ってもらってよかった」

男

「……ねえ」←別れたばかりという所にややひるむが、意を決して
女
「なに？」←なんとなく、そんなような雰囲気を感じ始めてきた
男
「あの、もし俺でよかったです」
女
「俺でよかったです？」←とりあえず最後まで本人の口から言わせる
男
「まあ、えーと、付き合ってもらえないかなあ……と思って」
女
「……」←とりあえず予感的中した
男
「……」←とりあえず彼女の言葉待ち
女
「……それって本気なの？」
男
「当たり前だよ、冗談じゃこんなこと言えないよ」
女
「……あたしなんかのどこがいいの？」
男
「どこがって……そりゃいろんなとこだよ」
女
「いろんなとこってどこ？」
男
「仕事を一生懸命やるとことか、優しいところとか……」
女
「中村君、まだ**あたしのことよくわかってない**から、そんなこと言うんだよ」
男
「そんなことないよ、浩子ちゃんのいいところわかってるつもりだよ」
女
「あたし、嫌などこいっぱいあるよ。あたしなんかと付き合ったら、中村君すごく嫌な思いしちゃうと思うよ」
男
「そんなの……付き合ってみなきゃわかんないじゃん。……俺のこと嫌

い？」

女

「嫌いっていうんじゃないけど……でも、まだ中村君のことよく知らないし……」

男

「……」

やや気まずい沈黙

女

「あの……友達からっていうんじゃないかな。とりあえずこうやって遊びに行ったりして、中村君のこともっとよく知りたい。それで中村君の気持ちに答えられそうだったら、ちゃんと中村君とお付き合いしたい。……それじゃいや？」

男

「いや、それでもいいよ」←駄目だと思ったが、とりあえず成功と見た

女

「うん。……あのね……」

男

「ん？」←ほっとしている

女

「あたし……中村君のこと、いっぱい好きになれるといいな(*^*)」

男

「うん(*^o^*)」←意外に前向きな一言に、かなり舞い上がる

女

「それじゃペンギン見に行こうか！」

今回は記念すべき第10回目ということで、女性が男性に告白された時に必ず言うフレーズを散りばめてみた。頷かれている方も多いと思う。

さて、今回の法則だが、この時にはまだ通用して来ない。問題はここからである。

男性が慎重に事を進めていけば見事カップリングとなるわけだが、早まってバイトの男同士の飲み会などで、上記の出来事を酒の力でべらべらと喋った挙げ句、『浩子ちゃんは、もうほとんど俺の彼女だから』などと

言ってしまうと法則の登場と相成る。

『友達から付き合いたい』は決して交際への確実な約束手形ではない。

女

「中村さん、ちょっといいですか」←バイト先で、敬語に加え「さん」
付けという他人行儀で

男

「あ、はい」←思わず「はい」

女

「休憩室に来てくれる？」←とげとげした言い方で

男

「あ、うん」←ただならぬ雰囲気を感じている

休憩室

女

「この間の飲み会で、この間のこと喋ったの？」

男

「え、いや、まあ……うん」

女

「なんて言ったの？」

男

「いや、だから……浩子ちゃんに告白したって……」

女

「それで？」

男

「……それでって？」←しどろもどろ

女

「あたし……まだ中村君の彼女じゃないよ」

男

「……うん」

女

「でも、そう言ったんでしょ？」

男

「いや、言ったっていうか……」

女

「……あんまり勘違いしてほしくないんだけど」

男

「……」

女

「あんまり、人に言うのやめてよ」

男

「……うん」

女

「あと、この間誘われたサッカーなんだけど、授業入って行けなくなっちゃったから」

男

「あ……そう」

女

「それじゃ」

男

「……うん」

女性というのは、自分の気持ちが確立していないうちに告白された男性に自分との関係を既成事実のように他人に喋られると、そのことに反発して大抵こうなる。例え手をつなごうが、キスしようが、最後までいっちゃおうが、男性に対する情がある程度のレベルに達してないうちに自分のことを彼女扱いされるとかなり怒るのだ。よって、例え親友であろうがなんであろうが、男性は決して付き合いが成立していない女性とのことを彼女扱いして喋ってはいけない。上の例のように、必ずどこからか彼女に漏れ聞こえるからだ。

ちなみに女性の方とはいうと、自分の友達に男性の告白の言葉から何から、**あったことをすべて喋っている**ということはよくあることだが、この辺のことは黙認しないと男性としては失格だろう。

ZEROの法則 11

男からしか電話をかけない間柄で、女に「そのうちこっちからかけます」と言われて電話を早々と切られた場合、いくら待とうがその女からはその後、100%電話はかかってこない

シチュエーション

共通の友達で紹介で知り合った男(会社員・27歳)と女(OL・23歳)。

何度か二人で食事に行ったり、動物園などに行ったのだが、男の方が一方的に燃え上がるばかりで女の方はあまりピンと来ていない様子である。とりあえず、最初のデートで電話番号を交換したが、女の方から男へ電話がかかってきたことは過去に一度、デートをキャンセルされた時だけしかない。

男は、(とにかく押すしかない)との意気込みを持ち、三日に一度は女の家で電話をかけている。そしてまた今日も女の家で電話をかけた……。

男

「あ、もしもし木村です」

女

「あ、はい」←なんか困った感じで

男

「あれ? どうしたの、なんか電話かけちゃまずかったかな?」←おちゃらけながらも動揺している

女

「いや、そんなことないです」

男

「いや、なんかまずかったら切るけど……」←ちよっと自信がなくなってきた

女

「え、大丈夫ですよ。平気です」←ちよっと明るく

男

「そっか」

女

「はい」

男

「……」

女

「……」

男

「……」

女

「……」

男

「あ、あのさあ、この間ね、CD買ったんだよ」←必死で探した話題がこれ

女

「へー、最近なんかいいのありましたっけ？」

男

「いや、イングヴェイのアルバムなんだけどね、すごいかっこいいんだ」

女

「……イングヴェイって？」←いぶかしげに

男

「いや、ハードロックのギタリストなんだけど」

女

「ふうん」←ハードロックにまったく興味なし

男

「……」

女

「……」

男

「あの、えっと、五十嵐さんは、なんか最近買った？」

女

「CDですか？」

男

「そうそう」

女

「んー……最近は買ってないですね。あんまりいいの出てないから」

男

「あ、そうなんだー」

女

「はい」

男

「……」

女

「……」

男

「あの一、あ、えっと、なんか、いつも電話しちやっでごめんね」

女

「いや、そんなことはないですよ」←なにか開き直ったような口調で

男

「ならいいんだけど……」

女

「……」

男

「……」

女

「また、そのうち、こっちから電話します」←いきなり

男

「え？」

女

「木村さんって夜はいるんですか？」

男

「あ、うん、土日はあんまりいないけど、平日は結構いるよ」←脈拍上

昇

女

「あ、じゃあ、その辺に」

男

「うん」←ちよつと幸せ

女

「それじゃまたその時にでも」

男

「うん」←想いが通じたような気がしてきた

女

「じゃあ、おやすみなさい」

男

「うん、おやすみー(*^~*)」

いつにも増してよくあるパターンだ。

ここで重要なポイントなのが、彼女は決して本気で彼に電話をかけようなどとは**微塵も思っていない**ということである(文中の男性には気の毒だが)。

では、彼女の「またこっちから電話します」は一体どういう意味が含まれているのか。

それは「**もう電話切りたいんですけど**」に他ならない。

話しても面白くない男性から電話がかかってきて、その電話を早めに切り上げたい場合、

「あ、これから出掛けるところなんで……」

は出前の催促に対する蕎麦店の言い訳みたいでちょっとスマートではないし、嘘をつくことにもなるから自分に対しても気まずい。が、「こっちから電話します」を使うと、(今はちょっと都合悪いんで、また電話します)というように男性には聞こえ、納得しながら電話を切れる。

女性としても、(ありえないけど、そのうちかけることがあるかもしれない)と考えられるので、自分に対しても嘘をつくことにならない。そして、「こっちからかける」と言うことで、向こうからの電話を、ある程度の期間、阻止出来るというおまけまでつく。まさに女にとってはすべてが丸く収まる究極の断り文句だ。

この分析が正しいかどうかは実際にこう言われた女に電話してみるといい。まず間違いなく、下の例のようになるはずだ。

男

「あ、もしもし、木村ですけど」

女

「ああ……はい」

男

「あの一……忙しかったんだ？」 ←こっちから電話しますと言われて丸一カ月経過

女

「はい、忙しいですね」

男

「……」

女

「……」

男

「なんか……あの、電話くれるっていうから、ずっと待ってたんだけどね、はは」

女

「ああ……ごめんなさい」←明日にでも地球が滅亡するかの様な暗い声で

男

「でも、忙しかったんなら仕方ないね」

女

「はい」

男

「……えーと……それじゃ電話切るね。別に用事はなかったから」

女

「はい」

男

「……あ、えっと……俺とご飯食べに行く暇ないよね……？」

女

「ああ……ちょっとないですね……**今年いっぱい**は忙しいんで……」←ちなみに今は7月である

男

「そっかあ……じゃ、身体に気をつけてね。……また電話しても大丈夫？」

女

「……んー……最近ちょっと家にいないんで……」

男

「あ……そう」

女

「すみません」

男

「いや、いいっていいって。それじゃおやすみー」

女

「はい、おやすみなさい」

女性からすると、この男性は「社交辞令を真に受けた、かなり迷惑な男」としか映らない。

結局のところ、女性の「こっちからも電話します」という言葉は、その言葉に反してまったく電話をかけないことで向こうの好意を自然消滅させるなかなか高度な断り文句であると言える。

女性にこの言葉を言われたら、さっさと気持ちを切り替えた方が私は賢明だと思う。

ZEROの法則 12

会う約束をした日までが長ければ長いほどキャンセルされる率が高くなる

シチュエーション

ねるとんパーティー(と、今でも言うのだろうか?)で知り合った二人の男女。男は29歳の会社員で女は27歳のOLである。女はかなりの美人で男をその気にさせる話術にも長けており、男はパーティーの席での女との会話、

女「もういい年なのに、わたし、このまま独身なんでしょうねー、多分(笑)」
男「いや、そんなことないですって。加藤さん、綺麗だし、性格もすごく魅力的な方だし」
女「またまたあ、うまいんだからあ(笑) そんなこと言っていると本気にしちゃいますよ」
男「ええ構いません、本気です」
女「え、え!?! 嬉しい! ありがとうございます。最近、言われたことないから感激しちゃった」←はぐらかし気味に
男「あ、あの、もしよろしければおつき合いたいんですけど」←いきなり超マジ顔
女「え……」←勢いに押された
男「今すぐに答えて下さいとは言いません。とりあえず電話番号だけ教えていただけますか」
女「……はい……わかりました」←ちよつと黙った後、ひきつり気味の笑顔で

が忘れられない。そして男は自分の誠意と好意を早速アピールしようと、パーティーの翌日、女の家には電話をかけた……。

男
「もしもし鈴木と申しますが、洋子さんいらっしゃいますでしょうか?」
女
「あ……はい、わたしですけど」←昨日とは違って、異様に警戒感を感じ

じさせる声のトーン

男

「あ、加藤さんですか？ 昨日のパーティでお会いした鈴木です」

女

「あ、はい……」

変な沈黙5秒間

男

「あ、あの一、えっと、いきなりなんですけど、加藤さんって休日とかは空いてますか？」

女

「……休日っていうと……土日とか祝日とかですか？」

男

「ええ、そうです」

女

「んー……(沈黙3秒)……一応、休みではあるんですけど……でも、お稽古ごととかに出かけちゃうんで、いつも空いているってわけじゃないです」

男

「ああ……そうですか」 ←ちよつとひるむ

沈黙3秒間

男

「あの、もしよろしければ、今度一緒に食事なんかどうかなーって、あははは」

女

「……食事ですか？」

男

「ええ」

女

「……わたし、結構食べられないものあるんですよー。油っこいものとか全然駄目で、あと生ものも駄目なんですよー」 ←とにかく、話題に対してマイナス方向に持っていく

男

「あ、でもおそばとかどうですか？」←めげずに頑張る

女

「あー……わたし、**そばアレルギー**なんです」

男

「ああ……そうなんですか」

女

「……」

男

「……」

女

「……」

男

「なんか好きな食べ物とかありますか？」

女

「……んー、あんまり**食べる**こと**自体**、**好き**じゃないので……」

男

「ああ……」←(もう駄目じゃん)と思いながらも、とりあえずもう一押ししよう的决心

女

「……」

男

「じゃあ、一緒にお茶だけでもどうですか？」

女

「んー……お茶ですか？ ……いつ頃？」

男

「あ、えっと、いつ頃がいいですか？」←ちよっと光が射し込んできた

女

「そうですねー……今週は駄目だし……来週も……無理ですねー……再来週はちよっとあれだから……まあ……再来週の次の週の日曜日なら……まだわかんないけど……大丈夫かも……まあ、**はっきりとは約束出来ない**んですけど……」←ポイント

男

「僕の方は全然OKです！ じゃあ、再来週の次の週の日曜日ってことで！」

女

「えっと、ほんと、まだはっきりとは約束出来ないの、予定がわかったら、こちらから連絡します。それじゃまた」

男

「あ、わかりました。それじゃ！」

今回のケース。女性は会う日を3週間ほど先に設定した。お茶を飲むぐらい、その気になれば明日にでも出来ることなのだが、なぜ、こんな先にしたのであろうか。それは簡単。「万全の理由を構築して誘いを断るため、少し時間が欲しい」からである。

弾みで電話番号を教えたはいいが、付き合う気はさらさらしない。しかし、電話で誘われてはっきりとその場で断るのもなんとなく気が引けるし、妙に強気で断って向こうに嫌がらせを受けるのも困る。それならば、とにかく時間を稼いで、向こうが納得出来る理由を作ってから断ろうという、そういう確信犯的(今風の使い方)な行動だ。

男性は時間が経てば経つほど期待感で盛り上がっていくのに対し、女性の方はいかにもうまく言い逃れるかという方法だけが頭を支配する。

その結末が以下の電話だ。

女

「もしもし、加藤と申しますけど健一さんいらっしゃいますか？」

男

「あ、僕です！！」

女

「あ、どうもこんにちは」

男

「こんにちはー」←びあのグルメマップ買って、万全の体制

女

「あの一、今度の日曜日のことなんですけど」

男

「はい！」

女

「ちょっと、突然仕事が入ってしまったもので……」

男

「はあ……」

女

「無理になってしまったんですよ」

男

「ああ……」←そんな気はしていた

女

「せっかく誘っていただいたのに、申し訳ありません」

男

「いや、仕事ならしょうがないですよ、ははは」

女

「ええ、そういうことなので……」←別の日にしましょうなどは口が裂けても言う気なし

男

「あ、あの、えっと」

女

「はい？」

男

「次の週の連休とかは……」

女

「あー、**友達と旅行行っちゃうんで**」

男

「ああ……そうですか……」

女

「ほんとにごめんなさい。それじゃ……」←また誘って下さいとは口が裂けても言う気なし

男

「はあ……」

ツーツーツーツーツーツー←電話切れた

大変、日本人らしい断り方である。いけるかもしれないけど……駄目かもしれないよと伏線を張った末に断るといふ、ちなみに比重的に言うと、いけるかもしれないは0.1%で、駄目かもしれないは99.9%ぐらいなのだ

が、それでも男性は「いけるかもしれない」の方に期待をかける。

しかし女性の方とは言えば、行く気など微塵もなく、次につながる話題を一切振らずに電話を切り、「わたしはあなたに対して興味はない」という心情をアピールしつつ、電話を掛けさせる動機をなくすというテクニックも駆使し、完璧に男性の好意を遮断する。まさにパーフェクトだ。

ZEROの法則 13

デートなどのイベント前後にタイミングよく女の携帯電話が壊れ、連絡が取れなくなったら、それは拒絶の合図

シチュエーション

23歳の男(大学生)と20歳の女(短大生)。二人は合コンで知り合ったのだが、男の好意にかなり押される感じで女は友達として男と付き合っている。

二人きりで遊びに行くことはあまりなく、大抵はお互いの友達を交えて数人でという形になっており、女を独占したい男はその状況をなんとか打開したいと思っている。

男は、女をなんとか彼女にしようと、あらゆるコミュニケーションツールを駆使して必死だが、女からは曖昧な返事が返ってくるばかりで、いつになっても一線を越えられない。しかしある日、電話での「1度でいいから、ちょっと車で遠出してないか」という男の強引な誘いに女はかなり迷いながらも珍しく乗ってきた。だが、その日はそれで電話を切り、男は、その後、約束を早く具体化しようと女に連絡を取ろうとするが、どのコミュニケーションツールを使っても取れず、結局、出かける予定だった日は過ぎてしまう。

そして1週間後。

今までまったくつながらなかった彼女の携帯に、ようやくつながった……。

男

「あ、もしもし、俺だけど」

女

「あ……はい」←観念したかのようながっかりした声

男

「なんか、全然連絡取れないけど、どうなってんの？」

女

「あー……ごめんなさい」

男

「携帯にいくらかけても、いつも電波が届かないところだしさあ」

女

「ああ……なんか、突然、携帯壊れちゃったんですよ。それで修理に出

してたから……それで、今日、修理から戻ってきたんです」

男

「壊れたって、どうして？」

女

「なんかよくわからないんですけど……使えなくなっちゃって」

男

「携帯ってそんなに簡単に壊れるもんなの？」

女

「さあ……あたし携帯電話屋さんじゃないんで、その辺はよくわかりません」

男

「ベルにメッセージ入れても、全然返事来ないし」

女

「ああ……ベルもなんか急におかしくなって……文字が表示されな
いっていうか」

男

「なにそれ？ 電池が切れてんじゃないの？」

女

「いやあ、電池は入っているみたいなんですけど、文字が表示されなく
て……」

男

「そんなことってあるの？」

女

「さあ……」

男

「メールも出したよ。もう10通ぐらいは出した。でも全然返事くれない
し。ちゃんと読んでるの？」

女

「あー、なんかいきなりハードディスクが壊れちゃって……。それでイ
ンターネットにつなげなかったんですよ。パソコンに詳しい友達に見て
もらったんですけど、駄目で……」

男

「ディスクがクラッシュしたってということ？」

女

「あたし、パソコンあんまり詳しくないから、その辺のことは全然わか

りません」

男

「だって、パソコン買ったのって1年前でしょ？ そんな簡単に壊れるものなの？」

女

「さあ……あたしパソコン屋さんじゃないし……」

男

「家の方にも電話かけて、全然出ないから留守電にメッセージ吹き込んでおいたよ。連絡くれて。それは聴いたでしょ？」

女

「それも、なんか、**知らない間に留守電機能がおかしくなっちゃって……**。再生が利かないっていうか……ボタン押してもテープが回らないんです」

男

「どのボタンも利かないの？」

女

「ええ……だから、全然聞けないんですよ」

男

「そんな壊れ方するものなのかな？」

女

「うーん……あたし機械オンチだからその辺のことはよくわからないんですけど……」

男

「アパートに行って、ブザー鳴らしても誰も出てこないしさ」

女

「あー……なんか、**この間から、ブザーも接触が悪いみたいで音が聞こえなくて……**」

男

「そんなことってあんの？」

女

「あたしにそう言われても……よくわからないので……」

男

「あのさあ、とにかく……あれっ？ もしもーし、聞こえるー？」

プツツ←急に電話が切れた

男

「あれ？ 電波切れちゃった。ったく、しょうがねえなあ」

ピッピピッピピビ←携帯にかけ直している

男

「……」

数秒後

「おかけになった番号は現在電波が届かないところにおられるか……」

男

「あれ？ おかしいな」

ピッピピッピピビ

男

「……」

数秒後

「おかけになった番号は現在電波が届かないところにおられるか……」

男

「なんだよ、また壊れたのか？」

ピッピピッピピビ

男

「……」

数秒後

「おかけになった番号は現在電波が届かないところにおられるか……」

男

「ったく、むかつくよなあ」

ピッピピッピピビ

男

「……」

数秒後

「おかけになった番号は現在電波が届かないところにおられるか……」

(以下、繰り返し)

賢明な読者の皆様は既におわかりだろう。

女性が**意図的に携帯電話の電源を切った**ということ。

ずっと連絡が取れなかったのも、本当に携帯が壊れていたからではなく、ただ単に伝声の電話を受け取りたくなくて携帯の電源を切っていたに過ぎない。その他のコミュニケーションツールについても、すべて同様だ。

男性からの過剰な好意を拒みたいときは、とにかく距離を置くということが必要である。

例えば今回の場合、これだけ気合いの入った男性に二人きりでドライブなんてものに誘い出された日には、ある程度、関係が進むことを覚悟しなければならぬ。

女性も気があるならまったく問題はないが、別になんとも思っていないし、相手のペースにはまってしまうだけのだけは避けたいと思っている場合、とにかく相手から受ける怒濤の攻勢をなんとか避けたいというのは当然の思いだろう。

この時、変に居留守を決め込むと、いろいろつつこまれた挙げ句に嘘がばれ、しどろもどろになってかなり面倒なことになったりするが、コミュニケーションツールが壊れたということにすれば、「その時は家にいなかった」「携帯を持って出かけなかった」「具合が悪くて出られなかった」など多量の嘘をつく必要がなくなり、気がかなり楽になる。「壊れていたんだからしょうがない」で済ませることが出来るのだ。

男性からの連絡を受けないようにして、相手の熱を冷まさせ、関係の自然消滅に持っていく。

なんでもいいから悪く思われることだけは避けたいという、なんとも女性らしい方法と言えらるう。

ZEROの法則 14

すべて知らないふりをされたら完全に脈なし

シチュエーション

大学の同級生である男女(共に21歳)。入学当初、男は女に一目惚れしてしまい、それからというもの、食事に誘ったり、プレゼントをあげたり、彼女と同じサークルに入ったりと、大変涙ぐましい努力を続けている。しかし、明確な告白は一度もしたことがない。とは言え、端から見れば、どう考えても男が女に気があるとわかる二人である。

夏のある日、男が「今日は行くところまで行くぞ」との意気込みで女を江ノ島花火大会に誘い、246号線に立ち並ぶラブホテルを横目にしながら助手席に座っている女を口説き始めた……。

男

「花火、綺麗だね」

女

「そうだねー。あたし、花火見るの久しぶりだよ。えっと、どこだったかなあ……鎌倉で3年ぐらい前に見て以来」

男

「へー。あ、でも3年前の鎌倉花火大会って俺も行ったよ。野郎3人でさ」

女

「えー、それって寂しくなかった？」

男

「うん、かなり寂しかった」

女

「彼女とか誘えばよかったのに」

男

「いや、その時、彼女いなかったし」

女

「じゃあ……今はいるんだ？」 ←男の顔を覗き込むようにして

男

「いたら、おまえ誘わねえって」 ←ひきつった笑いで

女

「ははは、そうだね」

ここで花火が連発で上がり、しばし女がその光景に見とれる。

女

「わあ……ほんとに綺麗……」

男

「あ、あのさ……」←血圧急上昇

女

「ん？」←ちょっと、頭を傾げながら

男

「おまえもすごく綺麗だよ」

嫌な沈黙5秒間

女

「……」

男

「……」

女

「**は？**」←この場をすべて冗談にしたいという顔で

男

「俺、今日こそおまえの気持ちを聞きたい。俺のことをどう思ってるの
かっていう」

女

「……そんなこと……」

男

「……」

女

「そんなこと急に言われても、答えようがないよ。だって、あたし、竹
内君のこと、いい友達ぐらいにしか思ってなかったし」

男

「でも、俺の気持ちには気づいてくれてたんだろ？」←熱くなる

女

「気持ちって？」

男

「おまえのことが好きっていう……」

女

「全然わからなかった。今初めて知った」←堂々と

男

「今初めてって……だって、去年のクリスマスイヴとかも二人で遊んだし、食事にも何度も行ったし(全部で50回、計15万円分、彼女に奢った)、プレゼントだって、誕生日とかにいっぱいあげたじゃん！(プレゼントの総額、たまごっち、ポケットピカチュー、ミスターピーンのティニア、G-SHOCKなど、総額20万円)普通わかるだろ！？」

女

「そんなのわかんないよ。だって、好きだなんて言われたことないもん」

男

「好きでもないのに、あんなにプレゼントするかよ、普通」

女

「そんなことあたしに言われてもわかんない」

男

「……」

女

「……」

男

「……」

女

「第一、あたし竹内君のこと、あんまりよく知らないもん」

男

「いや、知らないって……」←プライベートで100回は遊んでおり、学校でも毎日会ってる

女

「それじゃ、あたし今日、友達の家泊まることになっているから、車降りるね」

男

「……」

女

「ばいばい」

ガチャッ ドン←車のドアが開かれ、閉じた音

場内放送

「ただいまを持ちまして、花火大会は終了いたしました」

「聞いてないからわからなかった」。

会社などで上司に文句を言われた場合、よく出てくる言葉である。

しかし、実際のところは「聞いてなくてもわかっていただけ、めんどくさいからやらなかった」場合も多々ある。この場合、後で文句を言われても「そんなの知らなかった」でごまかすというシナリオが頭の中でがっちりとして出来上がっているのだ。

今回の例に関しても、「いくらなんでも気づくだろう」と言いたくなるほど好意の集中砲火を浴びたとしても、決定的な一言を云われなければ「告白されなかったからわからなかった。だから、あなたのことも友達としか思えなかった」で切り抜けるという、見事な自己弁護が炸裂している。

好意に気づいていたということを書いてしまえば、ややこしい展開になるのは確かだし、明確に断らなければならないというのもめんどくさい。しかし、「わからなかった」「知らなかった」と言えば、だから告白されても困る、とその場を切り抜けることが出来る。

実際、プレゼントを大量に贈り、食事を何度も奢って告白に持ち込んだとしても「それってあたしへの好意だったんだ。へー」などと言われて終わる例は多々あるだろう。一線(告白)を越えてこなければ、プレゼントをもらうことも食事を奢ってもらうことも、そんなに嫌じゃない。でも、恋愛感情は間違っても抱かない。男性としては、自分が今、アプローチしている女性からそういう扱いをされていないかどうか一度確かめてみるべきだと思う。

ZEROの法則 15

「付き合っているわけでもないのに」と逆ギレされたら終わり

シチュエーション

21歳の女性と23歳の男性。二人は同じ書店でバイトをしている。男は、忘年会の時に女の酔った仕草(可愛かった)を見て急速に気持ちを寄せ、さまざまなアプローチを試みた。そして、映画「タイタニック」を一緒に見た後、食事に誘い、そこで愛を告白。

この告白は、女性の「あなたの気持ちはすごく嬉しい。あなたは仕事もすごく出来るし、尊敬している。でも、あたしは今、好きな人がいるから付き合えない」というお決まりの一言で失敗に終わったが、「友達から始めてみて、好きになれそうだったらあなたの気持ちを受け止められるかもしれない」という、これまたお決まりの言葉で将来の可能性に希望をつなぐ。

そして一週間後。男はサンリオビューロランドに女を誘った。

だが、結局、彼女は来ずに、待ちぼうけをくった男は女の携帯に電話をかけた……。

男

「もしもし、小松ですけど」

女

「えー？ ちょっと、聞こえないんですけど」←周りで、男女の声が入り乱れている

男

「小松ですけど！」←大声で

女

「ああ、小松さんか。あのちょっと待って下さいね。……ちょっと、みんな静かにしてよ」

周囲の男A

「お、なになに男から!？」

周囲の男B

「おーい、みんな、男から電話だってよ！ 静かにしようぜ!(笑)」

女

「ごめんなさい。今、ちょっと飲み会やってるからさ」

男

「(飲み会って、ピューロランドは? と思いつつ)あ、別にいいよ。と
ころで……あの、今日って……」

女

「えー? なになに?」

男

「今日ってさ!」←大声で

女

「あ、うん、『今日って』なに?」

男

「俺と約束してたじゃん。サンリオピューロランドへ行くって」

女

「えっ? ……あれって今日だけ?」

男

「今日なんだよ」←ちょっと怒りながら

女

「あ、そっかあ。ごめんねー。あたし来週だと思ってた」

男

「……来週なら行けるの?」

女

「あー……」

男

「ん?」

女

「来週、ちょっと忙しいんだよねー」

男

「じゃあ、**最初から来週でも無理じゃん**」←正論

女

「……うん。まあ、またそのうちってことで」

男

「そのうちっていつ?」

女

「んー……、今月と来月はあたし予定埋まっちゃってるから、まあ、再来月……あー、でも再来月もあたし旅行行くからなあ……。ちょっとわかんない」

男

「再来月に旅行だからわかんないって、別に一カ月も旅行行くわけじゃないんだろ？」←正論

女

「確かにそうだけど、ほら、予定決まってないから、一応、ずっと開けておかないと」

男

「1日ぐらい、この日は大丈夫っていう日、あるだろ」

女

「えー？ でも、ないだもん。しょうがないじゃん。そんなにしつこく言われても困る」

男

「そういう言い方ってあんのかよ。人の約束平気で破っておいてさ」

女

「だから謝ってるじゃん。さっきから」

男

「そういう言い方で謝ってもしょうがねえだろ」

女

「ああ、はいはい、わかりました。今日は本当にすいませんでした。これでいいんですよ」

男

「……」

女

「じゃあ、気が済んだ？ それじゃ電話切るよ」

男

「ちょっと待てよ。まだ話ついてねーじゃん」

女

「話？ なんの話？ だいたいね、**あたしたち付き合っているわけじゃないんだよ！**」←とうとう逆ギレ

男

「……」←圧倒

女

「いきなりそんな風に言われても、どうしようもないじゃん。なんで**彼氏でもない小松さんに、そこまで**言われたいいけないわけ？」

男

「……いや、そこまでって、約束を破ったんだから……」

女

「ああ、もううるさい！ あたし、小松さんみたいな理屈っぽい人、嫌いなの！」

男

「……」 ← 哑然

女

「それじゃ、もう電話切ります。さようなら」

ツーツーツーツーツー←電話切れた

好きな男性がいる女性にとって、「恋愛感情を抱いていない男友達との約束」ほど軽いものはない。彼女との約束も女友達との約束もそれぞれ大事にする男性とは違い、女性は彼氏とただの男友達の約束に圧倒的な差をつける。よって、男友達との約束を平気でドタキャンしてくるケースが目立つ。

まあ、こうなっても、共に恋愛感情を抱いていないのなら特に問題も起こらないが、男性が女性に恋愛感情を抱いている(告白した)関係で約束の不履行が行われた場合は確実にめ事が起こる。

片想い中の男性は力の入れ方が違うから、女性を執拗に責める。「なんで?」「どうして?」と。しかし、これは無理もないだろう。男性からすれば、この日のためにした、うまい店がついている本を見たり、インターネットでデートコースを調べたりという努力を無にされたわけだから。ところが女性にしてみれば、これは「男性が勝手にやったことで」「そんなことをあたしに押しつけられても困る」わけである。

女性というのは、好きになった男性だけが特別なのであり、恋愛感情のない男友達はとりあえず気が合うというだけで、無難に付き合っただけ程度の普遍的な存在だ(人によって、気が合わずとも『友達になることで自分のステータスを上げられる』『自分のプライドをくすぐってくれる』『つまりアプローチしてくれる』存在の男友達を置く人もいる。勿論この場合、女性の言う友達関係とは《そう言っているだけ》程度で、つながりは

薄い)そういう存在の人間から責められたり命令口調されたりすれば、当然のように反発をする。その意識の表明が今回の法則につながるのだ。

ZEROの法則 16

秘密の共有を拒絶されたらまったく脈なし

シチュエーション

共に25歳の男女。二人は同じ会社の同じ部署に勤めている同期である。

この部署では、社内恋愛すると、そのまま結婚するという伝説があり、実際に最近も二組のカップルが社内恋愛を实らせた。男としては、この伝説に乗って女をものにしようという気持ちが強いが、誘ってもなかなか応じない彼女に苛立つ。

だが、10月10日体育の日。箱根までドライブにいかないかという男の誘いに女が珍しく乗ってきて、二人は箱根へと出掛けた……

男

「いい天気だねー」

女

「そうだねー」

男

「ちょっとその辺に車停めて、外出ようか」

女

「うん、そうしよう！」

男、車を駐車場に停める。

女

「わあ、空気が美味しいね。なんか、会社って空気が悪いからさ、こういう新鮮な空気を吸うと、ほんと気分いいよ」

男

「あー、田中さん(二人の上司)とか煙草よく吸うから、空気汚れているもんね」

女

「そうそう。あたし、あの人の前歩くと息止めてるよ。ヤニ臭いから(笑)」

男

「ははは」←あんまり笑うと、後が怖い。

話題が完結したため、無言状態が1分30秒続く

男

「あのさ」←咳払いをした後

女

「うん？」←のびをしていた

男

「あの……大したもんじゃないんだけど」

女

「うん」←表情が固まる

男

「……受け取ってほしいものがあるんだ」

女

「……」←表情、固まったまま

男

「……」←なんか言ってくれないと、何も言えない

女

「え、なにになにー？」←突然、繕ったように明るく

男

「ちょっと待ってて」←車に戻り、後部座席から紙袋を持ってくる

女

「えー、なんだろ？」

男

「……あのさ、前に欲しいって言ってたじゃん。だから」←紙袋を渡す

女

「開けてもいい？」←紙袋と男の顔を交互に見ながら

男

「うん」

女

「あ……！ これってラクロス(店名)のクッキー！？」

男

「うん」←得意げに。ラクロスのクッキーは、東京では買えず、長野県の直営店でしか手に入らない。ゆえに彼は、なんと長野まで行って買ってきたのだ。

女

「もしかして、長野まで行ってくれたのー!？」

男

「ああ」←(見たか、俺のおまえに対する愛情の深さを!)とアピール

女

「うそー、嬉しいよお」

男

「ほら、水谷さん(彼女の名前)って、この間、誕生日だったじゃん。それで、その時はちゃんとしたプレゼント渡せなかったからさ」←かなり得意げ

女

「うそー……。ほんと、ありがとう。ここのクッキー、本当に美味しいから嬉しい〜!」

男

「……それじゃ、少し歩こうか」←自分の手に落ちたことを確信

女

「うん!」

愛の力とは不思議なものである。どんなに無謀なことでさえ、彼女が喜んでくれればとやり遂げてしまうのだ。今回の例でいけば、好きな彼女が大好きなクッキーをわざわざ長野まで行って買ってくるという、男性の常軌を逸脱する行動がまさにそうだろう。

しかし、これがプラスに働けばそのままラブラブという可能性もあるのだが、これがマイナスに働いた場合、女性の常套文句の一つである『気持ちが悪くて受け止められない』か、『**なんか怖いよ……**』と言って泣き出すということはよくある。

だが、長けた女性はここからの行動がうまい。何も気持ちを真正面から受け止める必要はないのだ。とにかく、下の「箱根行きの翌日」を読んでいただこう。

箱根へ行った翌日。前日は、その後、おみやげ屋に寄って、彼女にぬいぐるみを買ってあげた男。二人だけの共有の秘密(箱根へ二人でドライブ、長野まで行ってクッキーを買ってきた、ぬいぐるみを買ってあげた)

を初めて持つことが出来、彼としては彼女との親密度が深まったと考え、万全の手応えを感じながら入社した。

男

「ふんふんふ〜♪」←鼻歌を歌いながら、タイムカードを押す

後輩社員

「あれ？ 五十嵐さん、ご機嫌ですね」

男

「ん？ いや、そんなことはないよ」

後輩社員

「俺は昨日、休日だというのに一人で映画見ましたよ(笑)」

男

「ははは、寂しいね」←余裕の言い返し

後輩社員

「五十嵐さんはどうなんすかー？ 彼女とデートとか？」

男

「いや、彼女なんて……まあ、うーん」←言いたくて仕方がない

後輩社員

「あれあれー？ 怪しいなあ？」

男

「いや、別に(笑)」←でも秘密にして優越感を持ちたい

二人、部署へ行くと、なにやら男女の社員が集まっている

男

「みんな、どうしたの？」

社員A

「あ、五十嵐さん、ごちそうさまー！」

男

「……」←悪い予感

女

「あ、五十嵐さん。昨日楽しかったねー」←さわやかに

男

「あ……うん」

女

「なんかさ、あたし一人じゃもらったクッキーとても食べられそうもな

いから、会社へ持ってきちゃった」

男

「……」

社員B

「五十嵐さん、さすがに長野で買ってきただけあって、これうまいっ
ス」

男

「……」

社員B

「でも、箱根へドライブなんていいよねー。あたしも行きたかった
なあ」

女

「そうだね。今度はみんなで行こうよ」

社員C

「だけど、五十嵐さんと水谷さんの組み合わせっていうのも結構意外で
すよね」

女

「うん、たまたま二人とも暇だったからさ。……あ、五十嵐さん、昨日
のぬいぐるみ、**近所の女の子**にあげたら喜んでたよ」

男

「……」

社員D

「ねーねー、今度はあたしにもなんか買ってよー」

男

「……」

こうして、二人だけの思い出はみんなの思い出へと変わっていくので
あった……。

社内恋愛に限らず、ある程度人数が限られたグループで恋愛している
カップル(うまく行っているカップル)というのは、自分たちの行動をすべ
て秘密にすることで余計に一体感を深めようとする傾向がある。

よって、いきなり婚約を発表したり、結婚を発表したりで驚かせてくれ
るし、また、よく聞いてみると、「実はあの飲み会の後、彼女の携帯に電

話してデートに誘ったのがきっかけだった」だの、「忘年会の後、二人でバラバラに帰ったと見せかけて、実はその後にベイブリッジへ行った」だの、二人だけの秘密がぞろぞろ出てくる。

このように、二人だけの秘密というのは、初期恋愛段階では自己開示(自分の欠点や秘密を打ち明ける)と共に重要なものであるが、どちらかが相手に気のない場合、そんなものを持たされても迷惑な話だし、後でそれがばれておかしいことになっても困るということで、早めに二人の思い出をオープン化し、みんなの思い出にして、出来事の重要性を低くする(つまり、みんなに喋っても問題ないほど軽い出来事だし、その程度の間柄なんだよとアピールする)という策が取られる。

もらったプレゼントを周囲にばらまくのも、「好意の分散」ということで、自分が受けたプレッシャーを少しでも軽くさせるために行うものだ。

まあ、はっきり書くと、こういう仕打ちをされる男は、女からすると付き合う付き合い合わないを考える以前に、**なんとも思えない人もしくは他人から見てなにかあると思われたくない人**であると言えるだろう。

ZEROの法則 17

恋愛相談をしてきた女に恋愛感情を抱くと九分九厘裏切られる

シチュエーション

コミュニティサイト「みんなのチャットルーム」にある「仲よしチャット」に入りしている男女。男のハンドルは「KENJI」でかなり真面目なタイプ、女のハンドルは「きょうこ」で誰とでも気軽に打ち解けるタイプ、二人とも普通の会社に勤めている。

最初は単なるネット友達という間柄であった二人だが、ある日、チャットで二人つきりになったとき、女が男に恋愛相談をしてきた。それは半同棲している彼氏とうまくやっていけないというもの。男は彼女を精一杯励まし、翌日、彼の元に女からメールが届いた……

メール1通目「ありがとう」・女

KENJI君、昨日のチャットでは本当にありがとう。

すっごく勇気づけられました(*^^*)

彼はちょっとしたことで暴力を振るったり、家を出ていったり、あたしはそんな彼に対して、どういう態度を取っていいのかわからないので、ここどころ毎日毎日落ち込んでいました。

でも、KENJI君とチャットで話していたら、なんだか楽しくて、嫌なことを忘れることが出来ました。

本当にいつか会えるといいですね(^^)

メール2通目「元気になってよかった\(^)/」・男

きょうこさん、こんにちは(^o^)

おいらの言葉が少しでもきょうごさんに届いたみたいなので、嬉しいです♪

なんかさ、おいらもきょうごさんの気持ち、わかるんだ。

おいらの女友達(あくまでも友達だよー(^^;))も情緒不安定なところがあって、いつも泣いてて……。やっぱ彼氏とうまくいってないらしい(--;)

もし、きょうごさんさえよかったら、今度遊園地とか行かない？ あ、別に下心とかじゃなくて、おいら、きょうごさんのことを励まして、楽しませてあげたいって思ってるだけだから(^^ゞ

迷惑じゃなかったら、返事下さい。

それじゃまたね(^^)/^^

メール3通目「うらやましい」・女

御返事ありがとう。どうしてだろう、KENJI君からのメールを読んでいると、心が落ち着いてくるのがわかります(*^^*)

KENJI君の友達さんも、ものすごくつらいんだろうね。

でも、彼女はKENJI君みたいな友達想いの友達を持って、幸福者だと思います。

はあ～、あたしの側にもそういう人いないかなあ。．．．．．

遊園地、行きたい！！ ば一つと遊んで嫌なことを忘れたい気分です。

メール4通目「遊園地」・男

きょうごさん、こんにちは(^o^)

それじゃ、遊園地行こう！ デイズニーランドはちょっと遠すぎるかな？ でもおいら行ったことないから(^◇^ 是非、きょうこさんと一緒にいきたい＼(^)/

なんていうか、きょうこさんのこと、守ってあげたいと思っています。おいらときょうこさんは、こうやってメールやチャットで話すだけだし、一度も顔を合わせたことないけど、それでもきょうこさんのこと、大切な人だって思ってるよ。

あ～、言ってしまった・・・けど、後悔してないから(^◇^

思えば、一カ月前、初めてチャットで会ったときはサッカーの話なんかをしていただけなのに、まさかそれから、こんな展開になるとは自分でも思っていなかったよ(^;))

それじゃまたね(^)/^^

メール5通目「とまどっています」・女

メールありがとう。

KENJI君からのメールを読んで、とまどっています。

困っているからとか、嫌とかじゃないの。

彼がいるのに、他の男の子からのメールでこんなにドキドキしている自分にとまどっているの。

KENJI君の、あたしを守りたいっていう気持ち・・・素直に嬉しいです(*^^*)

そういうことを言われたのって久しぶりな気がする。彼氏はそんなこと絶対言ってくれない。

デイズニーランドいいね(*^^*)

友達と1年前に行って以来だよ。なんだか懐かしい・・・

メール6通目「来週の土曜日は？」・男

きょうこさん、こんにちは(^o^)

おいらがきょうこさんの彼氏だったら、毎日でも言うよ。俺がずっと守る！ って。だって、ほんとの気持ちだから^^ゞ

ディズニーランドに行く日、来週の土曜日でどうかな？ きょうこさん、土日休みだったよね。おいらも土曜は休みなんだ。

もし都合悪かったら、言ってきて下さい。

あ、電話でもいいよ。おいらひとり暮らしだから大丈夫！

です！

明日、定例チャットだよ。

またきょうこさんとチャット出来るのが楽しみ\(^)/

それじゃまたね(^)/^^

そして翌日の定例チャット

KENJI：こんばんは\(^)/>ALL

出目金：やう>KENJI

ととろ：こんばんはー！>KENJI

瑞紀：おひさ～>KENJI

まゆまゆ：こんばんは(*^^*)>KENJI

きょうこ：こんばんは>KENJI

瑞紀：ねーねー、KENJI聞いてよ

KENJI：ん？>瑞紀

瑞紀：きょうこが彼氏にとうとうプロポーズされたんだって！！

きょうこ：まだ指輪くれただけだって(*^^*)>瑞紀

まゆまゆ：それって、婚約指輪なんでしょ？>きょうこ

きょうこ：んー、一応、そんな感じかなあ？(*^^*)>まゆまゆ

出目金：きょうこおめでとう！ そうかー、やっときょうこにも幸せが

ととろ：俺も相談に乗ったかいたががあったよ、彼女とのこと

きょうこ：うん、みんなありがとう(*^^*)

出目金：前に、僕の所に電話くれたときは別れるとかいう話をしていたのに(笑)>きょうこ

きょうこ：うん、あの時は本気でそう思っていた(^-^;>出目金

まゆまゆ：ねー、結婚式には呼んでよね>きょうこ

きょうこ：まだ早いよー(^-^;>まゆまゆ

瑞紀：あたし、てんとう虫のサンパをまゆまゆと唄う(爆)

まゆまゆ：うわ～、定番！！(笑)

出目金：きょうこ、今、幸せ？

きょうこ：うん、もう最高に幸せ(*^^*)>出目金

ととろ：ひゅーひゅー！！

きょうこ：彼が、**来週の土曜日**にあたしの両親に挨拶するって

まゆまゆ：きょうこ、ちゃんと彼をサポートしてあげるんだよ

ととろ：彼氏、緊張するだろうなあ

きょうこ：大丈夫、ちゃんとしつけておくから(笑)

瑞紀：(爆)>きょうこ

お知らせ：KENJIさんが退室しました。

悲惨である。こういう例はネットに限らず、現実社会でも結構あるものだ。

私の経験上、特別親しくない女性が恋愛相談を持ちかけてくる場合、彼女は私一人に言っているわけではなく、**彼女の周り**にいる**男全員**に言っている可能性が高い。こういう女性は、とりあえず自分の一時の寂しさが他人と話すことによって解消されればよいのであり、大して思い入れのない相手にも平気で相談(という愚痴)を仕掛けてくる。

ここで男としては、彼女の相談をさらっと受け流せばいいのであるが、もともと相手に好意を持っていた場合など、「自分は彼女の相談相手

に指名された」＝「彼女にとって自分は特別な人なんだ」という重大な思い違いをしてしまい、あるいは「ここで俺の、男としての価値を見せつけなければ」と意気込んでしまい上のようなことになってしまうのである。

例に出てくる彼女も対応馴れしており、一言たりとも**あなたと一緒にいきたい**とは書いていない。ただ、**ディズニーランドに行きたい**と書いているだけだ。

更に言うならば、付き合っ**て結構経つ**彼氏とのことを知り合いの男たちに相談する女性は「これからもそういう彼氏を支えていきたい」「そこにあたしの存在価値がある」んだけど、「でもたまには、男から優しい言葉を掛けられたい」わけであり、恋愛相談を受けた男が「別れた方がいい、俺だったら守ってやれる」と口説いたところでもともとそんなつもりはあまりないというのが現実だ。

こういう女性から仕掛けられた疑似恋愛に乗ることは極めて危険な行為であり、ほぼ100%の確率で時間の無駄遣いに終わると言える。

ZEROの法則 18

デート中、長電話をされたら絶望的

シチュエーション

カラオケ店のバイト仲間である男(フリーター・23)と女(17)。女は現役高校生で、見た目、明らかに「いまだきの子」である。

彼女の明るさと自由奔放さに惹かれた男は何度か彼女を誘うが、いつも妙に分厚い手帳を見せられ、「最近ちょー忙しいから」と断られていた。しかし、バイト代が入った日、めげずに女を誘い、「奢ってくれるならいいよ」ということで中華街に行く約束をとりつける。

そして二人は、中華街に出掛け、1人6000円のコースを食べ終わった……。

男

「炒飯おいしかったね」

女

「うん、ちょー美味しかった。なんか、さらさらしててさ、やっぱ、うちで作るやつとは大違いだよな。あ、電話かかってきた、ちょっとごめんね」

男

「別にいいよ」←にこやかに

女

「もしもし、あ、陽子！？ 嘘、あはははは、ちょー久しぶりじゃん！ うん、元気だよ！ え？ あはははははは、そうそう。うん、今？ えっとね、中華街。きゃははは、違うって、近所の中華屋さんじゃないよ、横浜の中華街だよ。うん、ほんとほんと、え？ なに？ 聞こえない？ あ、違う、違うよー、あはははは、そうじゃなくて、えっとね、バイト先の人と一緒に。うん、そうそう、もう、あんた、後で殺すから。きゃはははは、おめーに言われたくねーよって？ ごめんね。あ、そうだ、この間さ、まだかから電話がかかってきて一、なんか、彼氏と喧嘩したとか言っって一、でさ、かけてきたの、夜中の3時だよ。時間考えろって感じだよな。え、嘘！？ やっぱな、まだかってそういう奴だよな。あはは、これもなんか、おめーに言われたくねーよって感じだよな。明日？ あ、えっとちょっと待って、今、手帳見るから……あ、大丈夫、

夕方までバイトなんだけど、夜は空いてるから。うん、じゃあたし、宇多田の新曲唄っちゃうから、え、ううん、そう、まだ出てないんだけど、なんか、ラジオで全部流れたらしくて、もうカラオケに入ってるらしいよ。うん、ちょー早いよね。バイト？ そう、まだやってんだよ、あのバイト。なんかさ、前に言ってた店長、この間、あたしに説教してきた。ちょーむかつく。なんか、なんか、『森さん、前、掃除しなかったよ？ 今度はしっかりやってね』とか言って、はあ？ って感じ。あたし、ちゃんとやったのにさ、なんか一、やってないとか言って、ちょーむかつかない？ もうすぐあのバイトやめるから。あたし、有言実行だから言ったらやるからね。次のバイト？ 全然決まってる。うん、あはははは、まじでそうしようかな。なんかあたして、接客業とか向いてんよね。あ、近くに今度ファミレスが出来たんだ。で、そこでオープニングスタッフ募集してたから、応募しようと思ってる。陽子も一緒にやろうよ。え？ 嘘！？ まじで？ え、聞いたことないよ。そうなんだあ……コンビニ始めたんだあ。あたしもコンビニやろうかな。でもさ、コンビニっていろんなこと覚えなくちゃいけないから大変じゃん。ガス料金とか携帯のお金とか、めんどくさくていちいちやってらんないと思う。あ、ちょっとちょっと、聞いて！ そうそう、思い出した！ あのさ、今度あたし、雑誌に載るの！ うん、なんか、渋谷歩いていたらいきなり声かけられて一、『写真撮りたいんですけど』なんて言うてくるからは？ とか思って、一応話し聞いてたら雑誌のカメラマンで一、うん、もう、ちょーびつくり。えっとね、再来月号のeggに載るって言ってた。うん、もう絶対買ってね。でも、どうしよう、もし変な顔して写ってた。きゃはははは、もう街歩けないよね。あ、自意識過剰？ あんたに言われたくないよ、あはははは。あ、なんか、瞳もこの間、雑誌に載ったとか言ってた。うん、あの子、スタイルいいもんね一。だって、この間もあたしと一緒にごはん食べたとき、野菜しか注文してなかったもん。うん、まじで。あたし、その前で肉ばくばく食ってさ、あははははは、そうそう、ま、ダイエットしようとは思ってんだけどね、なかなか難しいんだよ。あ、この間、うたばん観た！？ そう、あの人、ちょーかつこよかった、なんか、すごい渋くて一」

店員

「あの、ラストオーダーのお時間なのですが、よろしいですか？」

男

「あ、もういいです……」

店員

「かしこまりました。では、ごゆっくり」

女

「え？ あ、違う違う、うん、なんかラストオーダーなんだって。うん、ちょー早い。ま、そんなことは別にいいんだけど。そう、それでさ、うたばんに出てた人、名前、忘れちゃったけど、めちやくちやかっこよかったよー。なんか、ちょっと妙子の彼に似てた、うん。妙子の彼ってほら、レストランの店長やってる人、そうそうそう、あの時、一緒にいた人！ あの人も結構かっこいいよね。この間、ちょっと話したんだけど、声も結構よくてー、なんか惚れちゃいそうになっちゃった、あははは。男？ もう、全然駄目。あたし、一生独りかも。なんかさ、あんまり自分としても興味ないし、彼氏が欲しいとかあんま思わないから、まあ、どうでもいいって感じ？ 前の彼氏と別れたの？ えーと、あれいつだったかな、確かね、2カ月ぐらい前だったと思うよ。うん、そう、なんかー、この間電話かかってきてー、『元気？』とか言ってるから、あたしちょーむかついて、用事があるからとか言ってるさっこと切ったもん。うん、ちょーうざい。未練がましいよね。ほんと、あいつと付き合ったの失敗だったよ。もう、携帯も解約しようと思ってんの。だってさ、夜中とかにあいつかけてきてんだよ。3時ぐらい。もう、ストーカーだと思わない？ まじで今度電話してきたら、警察呼ぶって言ってやるから。え、なにになに、これから？ 嘘！ いいよ、え、ちょっと待って、ねー、今何時？」

男

「え……8時30分かな」

女

「なにー？ ちょっともう一回言って」

男

「8時30分だけ」

女

「あ、ごめんごめん、あ、じゃあさ、9時に横浜駅で待ち合わせしようよ。うん、9時ね、9時。うん、じゃあ、またね！ バイバーイ！」

男

「……えっと」

女

「あ、ごめん。あたし、これから友達と会うから、ほんと、今日はありがとう。また誘ってね、それじゃばいばい！」

ギューーン ←自動ドアが開く音

店員

「ありがとうございましたー」

文中に出てくる彼に掛ける言葉がない。

彼女が自分に対し、いかに無関心であるか、そして思い入れがないかをこういう形で知ってしまった彼に未来はあるのだろうか。

大変残念なことに、彼が「今度、逆の立場に立ったら絶対長電話してやる」と思ったとしても、

- 彼女がバイトをやめて音信不通になる
- 一緒に食事してくれない
- 食事してくれても、電話がかかって来ない
- かかってきて長電話したとしても、**なんとも思われない**

という現実を目の当たりにする。

恐らく、こういう女の子(悪く言えば礼儀知らず、よく言えば小悪魔的・食事の誘いにOKしながら、気のない態度を取るというアンバランスさが)をなぜか好きになってしまう男性というのは、それなりの数いると思うが、私は個人的にやめておいた方がいいと思う。

もし、どうしても好きだと言うならば中途半端が一番いけない。どんな言葉を返されようが真剣に自分の気持ちを伝えよう。どんなに不器用な言葉であっても、きっと気持ちは伝わるだろう。電話切れよと言えば素直に切るだろうし、好きだと言えば、それなりの目で見られるようになる(多分)。

自分のことを好きなのか、人に奢るのが好きなのか、若い子と一緒にいらればいいのか、どうにもわからない態度を取っては、彼女もそれなりの態度しか返せないのは当然だ。

ZEROの法則 19

その気のない女は話を合わせない

シチュエーション

4月から社会人になる男(24)と4月から大学4年生になる女(20)。

二人は同じ大学の先輩後輩でサークルも一緒である。

男は毎週のように女の携帯にかけデートに誘っていたが、「今、気持ちに余裕がない」とのよくわからない理由で断られ続けてきた。しかし、押しが効いたためか、とうとう八景島シーパラダイスに誘うことに成功した……

男

「イルカ可愛かったよね。なんか、すっげえ小さいやつ」

女

「ええ」←前方を見ながら返事

男

「俺的にはペンギンもよかったな。水槽往復しててさ」

女

「そうですね」←相変わらず前方を見ながら返事

男

「アザラシもいい味出してたよね」

女

「ええ」←やっぱり前方を見ながら返事

男

「……」

女

「……」←しゃきしゃきと歩いている

男

「……」

女

「……」

男

「……あ、もう9時過ぎてるよ！」←突然

女

「あ、はい」

男

「あの、ほら、えっと、あのさ、あ、そうだ、喉乾いてない？ 最近、海のサブリって出たじゃん。あれに凝ってんだよね。珊瑚エキスだかなんだかってのが入ってるんだって。……あ！ あそこに売ってるよ！ うわあ、なんかすっげーラッキー、奈々子ちゃん、どれにする？ コーラ？ それともサブリ？ ウーロン茶もあるよ！」

女

「っていうか、いいです」←きっぱり

男

「え？」

女

「喉乾いてないから」

男

「え……で、でも、ずっとなんにも飲んでないじゃん」

女

「でもいいです」

男

「いや……でもいいですって、ほんとにいいの？」

女

「はい」

男

「そう……か」

女

「飲みたかったら別にあたしに遠慮しなくていいですよ」

男

「いや、あははは、別に俺もそんなに飲みたいっていうわけじゃないからさ」

女

「……」←再びしゃきしゃき歩き出す

男

「あ、そうだ、あのさ、腹減ってない？ もう、俺ペコペコだよ。ここからだと、どの辺が近いかな。桜木町に行くか、横浜に出るか。そうだ、この間雑誌で読んだんだけど横浜スタジアムの近くに美味しいレストランがあるんだって。オムレツが特に美味って書いてあったなあ。オ

ムレツってたまに食べるといいよね。俺、たまご使った料理はわりと苦手なんだけど、オムレツだけは別。もう、毎日食べたって飽きない。よし、じゃあ、行こうか！」

女

「いいです」←再度きっぱり

男

「……いや、いいって、だって俺たち、10時間以上なんにも食ってないよ？」

女

「あたしはお腹空いてませんから」

男

「いや、でも……」

女

「食べたかったら別にあたしに遠慮しなくてもいいですよ」

男

「いや、あははは、別に俺もそんなに腹減ってるっていうわけじゃないからさ」

女

「……」

男

「……あ、じゃあ、軽くコーヒーでも飲んでいこうか。ほら、その喫茶店で。最近、缶コーヒーばかり飲んでいるから、たまにはこういう店で飲みたいと思ってたんだ。でもさあ、最近結構缶コーヒーも美味しくなったんだよ。ほら、タイガー・ウッズがCMやってるワンダとか、あと、ポスもうまいんだ。だけどなんだかんだ言って、やっぱ喫茶店のコーヒーにはかなわないよなあ。えっと、2軒あるけどどっちにしようか。あっちの方がいいかな、なんか雰囲気的にも。向こうはちょっと寂れてるもんねー。じゃ、あっちにしよう！」

女

「あたし、いいです」←三度きっぱり

男

「……コーヒー嫌いとか？」←涙目

女

「つていうか、さっきも言ったけど、お腹空いてないし、喉も乾いていませんから。高橋さん、コーヒー飲んできていいですよ。あたし、そこ

ら辺の店で適当に時間潰してますから」

男

「いや、そういうわけにはいかないから……じゃあ、もう帰ろうか」

女

「そうですね」

男

「奈々子ちゃんは川崎だよな？」

女

「そうです」

男

「じゃあ、一緒に電車だね。俺は品川に出て、山手線だから。よし、行こうか」

女

「あたし、今日は逆方向から帰りますから、どうぞお先に。もうすぐ電車来る時間ですよ」

男

「逆方向って……」

女

「これから茅ヶ崎の友達に会いに行かないといけないので」

男

「ああ、そう……なんだ」

女

「それじゃ、今日はありがとうございました。さようなら」

こちらはまったくその気がないのに、何度も何度も性懲りもなく誘ってくる男性。女性からすると彼は悪徳商法の電話勧誘員に近いものがある。

永久に断り続けて関係を絶つ女性の方が多いが、中には「はっきり言うてうざったいけど、電話で『あなたに恋愛感情を持つことは一生ない』ときっぱり言えるほどあたしは強くないし、しょうがないから一度だけ付き合って、こっちの態度でわかってもらおう。それに一度会えば向こうも気が済むだろう」と考える女性もいる。二人きりで会えばなんとかなるという男性の押しに負けたのだ。

しかし、男性に対して恋愛感情を持ってしまわないわけではない

が(男性の熱意がうまく作用した場合)、多くは上のパターンのように話を合わせないことで盛り上がりと男性に対する感情移入を防ぎ、壁を作ったままデートを切り抜け、その後、男性から誘いの電話がかかってくる(あたしは一度あなたに付き合っただけだよ?)という意識を持ってきっぱりと断ることになる。

ここまで強い意志を持たれると、男性としてはお手上げだろう。しかし、多少強引でも「ジュースを2本買ってきて」「粘るだけ粘ってレストランに連れ込み」、勝負するべきだ。引き下がっても勝負しても駄目な時は駄目なのだから。

傍から見たら無理そうなことでも情熱を持って当たれば叶えられる場合もあるが、引きっぱなしでは何も起こらない。

ZEROの法則 20

■ ネット恋愛はこうして終わる

シチュエーション

恋愛相談系掲示板で知り合った21歳同士の男女。男のハンドル名は「ハク」、女のハンドル名は「姫」。語尾に☆、♪、～、りゅん、にゃあなどを使う「姫(デパート受付嬢)」は掲示板でもチャットでもアイドルだったが、男に振られた傷が癒えていなかった。

自称反町隆史似の「ハク」はその彼女を守りたいと、チャットとメールで熱烈アタック。最初は警戒していた「姫」も少しずつ心を開き、やがて二人はネット恋愛を開始した……。

メール1通目「おはよ♪」・姫

ハク、おはよ♪ はい、おはようのキスだよ、ちゅっ(はあと)
今日はハク、お仕事なんだよね。帰りは遅くなりそう？ もし、疲れてないなら電話でお喋りしたいな。でも、無理だったらいいよ(こんなこと書いたら、気にするかな?)

昨日はすごいびっくりすることがあったんだよ。年配のお客さんを案内していたら遠くからいきなり花束を抱えた人がズカズカやってきて、「僕と付き合ってください!!」なんて言うの。実は隣にいたさつきちゃん目当てだったらいいんだけど、もー、ちょービックリ。隣にいたさつきちゃんもかなーり驚いてたよ。

でも、さつきちゃん、すごくかっこいい彼氏とラブラブだからねー、花束持ってきた人は残念でした♪ って感じ

なんかねー、こうやってメール書いていても顔がにやけちやう♪ 明後日、ハクと会えるんだね。どんな顔しているのかなーってちょっとドキドキしているけど、今なら、どんな姿でも絶対ハクのことを受け止められると思う(ずっと、不安にさせていてごめんね)。

だけど、あたしの方がハクに受け入れられないんじゃないかなあって。。。

でも、大丈夫だよ☆

ハクのこと、信じてる。
大好きだよ☆

メール2通目「ただいま♪」・ハク

ただいま、恵美(※姫の本名)

電話受けられないでごめん。めっちゃかけようと思ったけど、同僚と飲んでいてチャンスがなかった。。。Σ(￣ロ￣lll)

今日は恵美のキスのおかげかな、今日は仕事で上司に誉められた♪
それにしても、さつきちゃんびっくりしたやろなあ(;´Д`)(※ハクは関西圏の人間ではない。ネットで時たま似非関西弁を使う東京在住の人間である)

その男もずいぶんと思い切ったことやるな。いきなり花束買うなんて、普通の男には出来へんことやね。

だけど、よかった。え、なにがって？ そりゃ、恵美にその男が変なことしなくてってこと。俺がその場において、男が恵美に手を出していたらぶっ飛ばしていたかも・・・(笑)。

日付が変わったから、恵美と会えるのもう明日なんや・・・。なんか信じられん(@.@;)。俺はネットで知り合った人と会うのは初めてで、だからめっちゃ緊張するかもしれへんけど、そうだったら許してな(笑)。

毎晩、恵美からもらったブリクラにキスしてるよ(*^~^*) だから、俺が恵美のこと受け入れられないなんてこと、絶対ない！！ むっちゃかわいいやん、恵美。っていうか、俺にとって恵美は一番。性格も顔も、なにもかも一番！！ だから心配すんな！(〃^0^〃)／

愛してるよ、恵美。

メール6通目「着いた」・男

今、着いたよ。どこにいる??

そして二人はついに顔を合わせた……

ハク

「え、えーと、改札の右側、右側……わかんないな、どこだ？」←携帯を持ちながら

姫

「ハクはどんな格好してる？ あたしは……」

ハク

「あ、ちょっと待って」

ハクの目に、青い傘を手にした内山理名系の可愛い子が映った。

ハク

「も、もしかしたら、青い傘持ってる？」←興奮気味

姫

「うん……え、どこにいるの!? どこどこ？」

ハク

「ここだよ」←手を振る

姫

「……」←ハクは大助・花子の犬助似だった

ハク

「ディズニーシー、もう3回目だけど改札なんてあんまりちゃんと見たことないし、ここで待ち合わせすることなかったから」

姫、笑顔でハクに歩み寄る。

姫

「こんにちはあ」

ハク

「あ、こ、こ、こんにちは」

姫

「えっと、**どうしますか？**」←いきなり敬語

ハク

「……え？」

姫

「いや、ほら。もしかしてお腹空いてるかなあとか思って」

ハク

「あ、大丈夫、出る時食べてきたから」

姫

「(領く仕草をした後)あたし、ちょっとお腹減ってるんですよね」

ハク

「じ、じゃあ、どこかで……」

姫

「そこにクレープ屋さんがある。あそこで買っていきます」

姫、早足でクレープ屋へと行き、自分とハクの分、二つ買ってくる。

姫

「食べますか？」

ハク

「う、うん」

二人、目的地である東京ディズニーシーへと向かう。姫は前方を見据えたまま、**まったくハクの方を見ようとし**ない。

ハク

「なんか……あの……」

姫

「え？」

ハク

「い、いや、やけに**早足**だなあと思って、はははは」

姫

「そうですか？ あたし、いつもこのぐらいで歩いているんですけど。それなら、ちょっとスピード落としますか？」

ハク

「あ、べ、別にいい」

姫

「……」

ハク

「……」

姫

「……」

ハク

「……」

この後、二人の無言状態はディズニースーまで続いた。

そして、ディズニースーでも黙々と遊び、やがて別れの時がやって来た。

姫

「今日はどうもありがとうございました。楽しかったです」

ハク

「あ、俺も楽しかったよ、うん」←ふと時計を見ると**まだ午後6時前**

姫

「あ、そうだ、言っておかなくちやいけないんですけど」

ハク

「うん？」

姫

「実は来週からデパートが改装するみたいで、なんか、あたしも手伝わなくちやいけないっていうことになってるんです。もう、まったく一っ
て感じなんですけど」

ハク

「そうなんだあ」

姫

「だから、今までみたいに携帯とかでメールのやりとり出来なくなっ
ちゃうと思うんです。とりあえず落ち着いたらこっちから連絡します。

まあ、いつ落ち着くのかちょっとわかんないんですけど」

ハク

「あ、うん……」

姫

「それじゃ、今日はどうもでした」←頭を下げる

ハク

「あ、あの」

姫

「はい？」

ハク

「次はいつ会えるのか……な？」

姫

「(少し考えた後)あたし、中途半端なこと言って約束破りたくないんで、ちょっと今の段階ではなんとも言えないですねー。ごめんなさい」

ハク

「あ、そうか、うん、わかった」

姫

「それじゃ、もうすぐ電車来ちゃうから行きますね。えっと、ハクは向こうの方だね。なんか、バタバタしちゃってごめんね。それじゃ」

ハク

「うん、またね」

こうして、二人は初めてのデート(?)を終えた……。

姫からのメールはまったくなく、ハクもメール出来ず、三カ月が経過した。

ハクは何度か携帯に電話を掛けたかいつも留守電。番号通知なのに折り返しの電話がない。夜、二人が会話していたチャットにも姫は姿を見せなかった。いったい、どうすればいいんだ。ハクは考えた末、姫をデートに誘うことにした……。

メール7通目「お久しぶり」・ハク

お久しぶりです、覚えてますか？ ハクです。
ディズニーシーは本当に楽しかった。ありがとう。
随分と仕事が忙しいみたいだね。俺の方も最近結構忙しいけど、なんとかやっています。
もしよかったら、また姫と会いたんだけど、都合の方はどうですか？ お返事待ってます。

メール8通目「Re:お久しぶり」・姫

ご無沙汰っ♪
ごめんねー、ハクとメールのやりとりしていた時とは大違いに仕事が忙しくて、毎日帰ってくるとすぐバタンなの。
それでも、さつきちゃんに誘われて合コンに行ったり、あたしって結構パワーあるかも。。
ハクが元気そうでなによりです。これからもお仕事頑張ってね。
それでは。

メール9通目「ディズニーランド」・ハク

本当に忙しいんだね。大丈夫？ 体には気をつけてね。
この間、ディズニーランドのパスポートを二枚もらったから誘おうと思ったけど無理っぽいね・・・。

メール10通目「Re:ディズニーランド」・姫

ディズニーランドは無理だなあ。ごめんね。

お友達を誘って楽しんできて下さい☆

最近、気になる人が出来てちょっとハッピーな姫でした♪

メールのやりとりをどれだけしようが、好きという言葉をどれだけ交わそうが、初対面の印象によってはすべてが水泡に帰すネット恋愛。

性格が好きになった、だから付き合うという言葉の後ろには、「あなたが**人並みの容姿**ならね」と付くことが多い。性格に難ありと思われるのが嫌だから、あえて口にしないだけだ(特に女性)。

今回のケース、初対面で女性は男性に対して引いてしまったわけであるが、それがはっきりわかるのは敬語よりも「相手の顔を見ない」ことであったりする。並んで歩いている時、自分は相手を見ているのに相手はずっと前を見ながら話していたりした場合、相手はこちらの容姿に対してかなり困惑していると思っていい。そして、会話が弾んだように思えても、何時間も一緒にいられたとしても、食事中や歩いている時、女性はこちらの顔をまったく見ないのなら状況はかなり厳しい。

だが、予想もしていなかった個性的な容姿だからびっくりしているだけであり、生理的に受け付けないという状態ではない、というのなら、なんとかなるケースもある。

しかし、姫にとってハクは生理的に受け付けない男性であったようだ。

ディズニーシーに行った後のメールで、巧みにハクの気持ちを交わす姫。

「合コン」「気になる人が出来た」というキーワードをさりげなく繰り返して、ネット恋愛関係はもうとつくの昔に終わったよねとアピールしているあたり、大変心憎い(実際は、姫が暇になるのを待っている状態であり、恋愛関係は継続しているはずなのだが)。

ネット恋愛は言葉通り、あくまでもネット上での恋愛であり実際の恋愛には至ってない。よって、その脆さは普通の恋愛関係の比ではないのだ。もし、このままやりとりを続けていったら好きになるかもしれないと思ったときは、特別な感情を抱く前になんらかの方法でお互いの顔を知っておいた方がいい。直接会うのであればコミュニティの主催で行われるオフ会などを利用するのが手だ。そうすれば、今回のケースのようなお互いにとって悲惨な話は確実に減少するだろう。

ZEROの法則 21

告白時に、「ありがとう」とお礼を言われると失恋確定

シチュエーション

某文具メーカーに勤める女(19歳・事務)と同じ会社に勤める男(28歳・営業)。会社で行われたイベントをきっかけに男の方が「わたし、魚食べたことないんですう」などの不思議発言連発の女に好意を持つようになり、電話やメールで何度か接触。最初はよそよそしかった女だが、次第に男に対して甘える素振りを見せるようになり、男の方はこれは行けると東京ディズニーシーに誘い、告白することにした……

男

「あ、美紀ちゃん？ 柴村です。今平気？」

女

「うん、へいきい～」

男

「何やってたの？」

女

「猫と遊んでたの」

男

「あ、ノラとだ」←美紀の飼っている猫の名前。

女

「うん」

男

「……」

女

「……」

男

「美紀ちゃん、今日はなんか元気ないね。どうしたの？」

女

「うゝ ううう(雰囲気伝えるための表記ですので目を瞑って下さい)」

男

「相談に乗るよ」

女

「……実はあ、美紀、会社で怒られちゃった」

男

「どうして？」

女

「美紀が間違っってディスクの大事なデータを消しちゃったんです。詳しい人が復活？ させようと頑張ってくれたけど駄目で……」

男

「あー、そうかあ。だけど、しょうがないよ。そういうミスは誰にでもあるよ」

女

「そうかなあ……」

男

「そうだよ。元気出せよ」

女

「ううう。そう思ってるけど凹んでる」

男

「俺はいつだって美紀ちゃんの味方だし、いつでも相談に乗るから」

女

「ほんとに？」

男

「ほんとだよ。だから、落ち込んだら遠慮なく俺に電話してきなよ。いくらだって話し聞くから」

女

「……※ん」

男

「よし、じゃあ元気出すために遊びに行こうよ！ ディズニーシーとか」←これ幸いにと

女

「わあ、行きたい行きたい！ 行こ行こ！！ 楽しみだあ」

男

「よし決まり！」

女

「わ～～～い！」

まあ、その辺に普通にある会話例だと思う。ポイントは女が発した「……ん」という言葉だろうか。これは「うん」という返事を短くした女性独特の言い回しで、「ちょっと甘えている自分を表現したい」の意で使われる。恐らく、受話器の向こうでは首を小さくカクンと縦に振っているのだと考えられるが、実際に現場を見たことがないので正確なところはわからない。男の方は、甘えられてるんだ、俺のことを好きなんだと舞い上がってしまう場合も多いが、お兄ちゃんと見ている男、友達、気の置けない会社の先輩回りでも普通に甘えるので注意した方がいいだろう。

デイズニーシーでさんざん遊んで(ちなみにお金は男持ち)その帰り

男

「楽しかったね」

女

「うん、楽しかったあ。また来ようね！」

男

「そうだね」

女、にこにこしながら前に歩いていく

男

「美紀ちゃん」

女

「うん？」

男

「手……つなぐ？」 ←脈拍急上昇

女、黙って左手を伸ばして男と手を繋ぐ。男の下半身が**ちょっと反応**

男

「美紀ちゃんの誕生日って来月だったよね」

女

「うん、そうだよ～」

男

「なんか、欲しいものある？」

女

「え、なんか買ってくれるの？」

男

「あんまり高いものじゃなかったらね(笑)」

女

「わーい、えっとねー、えっと、じゃあ、プーさんのぬいぐるみ！」

男

「プーさん好きなの？」

女

「うん、大好き。美紀の部屋にもいっぱいあるんだよ」

男

「へえ。そっか、じゃあプーさんのぬいぐるみ、プレゼントしてあげる」

女

「わーい！」

前方に舞浜駅が見えてきた。男は今までの実績(度重なるメールと電話、何度かのデート、そして今日のディズニーシーと手を繋いだこと)から考えて事実上「落とした」と踏んだが、早いうちに確実にしたいと考え告白を決意した

男

「美紀ちゃん」←立ち止まって

女

「はい？」

男

「……俺、美紀ちゃんのこと、ずっと大切にしていけると思う」

女

「……」

男

「今日みたいに遊びに行ったり、この間みたいに励ましたりして」

女

「……」

男

「だから……さ、あの、俺と付き合ってくれないかな」

女

「……」

男

「……」

女

「……」

男

「……」

女

「ありがとう」

男

「……」 ←それってどっち方向のお礼？ と思いながら声を出せず

女

「わたし、柴村さんとこうして遊んでいるとすごく楽しいです」 ←突然、**自分のことをわたしと言い始める**

男

「……」 ←不安

女

「わたし、兄弟がいなくてお兄ちゃんとかに憧れていたし、だから、柴村さんがこうやっていろいろ遊んでくれると本当に嬉しいし、お兄ちゃんがいたらこうして甘えたりするんだろうなあって思います」

男

「……」 ←悪い方向に話がずれてきたのを確認

女

「今のわたしは会社の仕事とか満足に出来なくて、だから一生懸命仕事を覚えようと思っていて……恋愛とかを考える余裕はなくて……もし、わたしが甘えてしまったことで柴村さんに**勘違いさせてしまったのならごめんなさい**」

男

「……」

女

「だけど、わたしにとって柴村さんは大事な人です。あの……それだけはちゃんと伝えたいです。ごめんなさい」

男

「……」

女

「それじゃ、電車来るからここで。今日は本当にありがとうございました」←手を離して、その手を振る

男

「……」

女

「じゃあ、明日、仕事頑張りましょうね」

男

「あ……」

女

「はい？」

男

「あの……お兄ちゃんから恋人に昇格出来る可能性ってあるかな」

女

「……」

男

「……」

女

「ごめんなさい(=しつこいんだよ、馬鹿野郎)。それじゃほんとに電車来ちゃうんで」

個人的には鉄板の法則である。「ありがとう。わたしも好きでした。よろしく願います」となったパターンに出会ったことがないし、また聞いたこともない。もし、ありがとうから始まってOKとなるなら、「ありがとう、嬉しい、でもわたしなんかでいいの？ わたし、気が強いし〇〇くんのことを傷つけちゃうかもしれないよ」と、途中で「でも」が入るパターンだろうが、「ありがとう、嬉しい、でもわたしにとって〇〇さんはお兄ちゃんです」となることの方が多いと思うので、でもが入ってもまったく信用出来ないし、してはいけない。

男性としては、「ありがとう」が来たから「もう聞かなくてもわかる」ではなく、「ありがとう」から女性が構築していく、

あなたの告白を受け入れられなくてごめんなさい、あなたは決して嫌な人ではないけど、セックスはしたくありません、だけどわたしのことを

恨んだりしないでね、別にわたしが悪いって話じゃないよね、
だって、好きっていい人だからとか、適当に甘えられるからと
か、一緒にいると楽しいからとか、そういう単純なものじゃないで
しょ、今日のことは二人だけのいい思い出にしましょう、それに顔も見
たくないって言ってるわけじゃないんだから、間違っても他の人にわた
しの悪口なんて言わないでね、とにかく変に恨まれたくないので告白し
てもらったことに対するお礼みたいなのは“こんなわたしを好きになっ
てくれてありがとう”みたいな感じで多めに言っておきます、本当にどう
もでした、出来るだけ早くわたし以外の女に目を向けて下さい、よろし
くお願いします。

という雰囲気をきちんと受け止めて去っていききたいものである。

この読み物はすべてフィクションで構成されています。作中に出てくる人物・出来事はいずれも実在の人物・出来事とは一切関係ありません。

ZEROの法則(ゼロのほうそく)

2010年5月15日 ePubデータ作成

著者 工藤圭(くどうけい)

site: <http://kudok.com/>

mail: webmaster@kudok.com

TwitterID: [@kudok](#)
